

日常の外縁のゆらぎを誘発する建築  
—物の様相を空間に帯びさせる設計手法—

東京理科大学大学院  
工学研究科 建築学専攻  
坂牛研究室 修士課程

4120546 山口 海

指導教員 主査 坂牛 卓  
副査 今本 啓一  
副査 伊藤 裕久



## **Abstract**

### **ARCHITECTURE THAT TRIGGERS FLUCTUATIONS IN THE OUTER EDGES OF EVERYDAY LIFE**

**A design method that imbues a space with the aspect of an object**

**Kai YAMAGUCHI**

Observation is the act of gaining a deeper understanding of an object by repeating our perception of it. In modern life, observation is a very valuable act. However, seems to be seldom done properly. But even in modern life, we do something similar to observation. It is the "fluctuation of the outer edge of the everyday". The purpose of this research is to define the fluctuation of the outer edge of everyday life within the framework of the subject's perception, and to propose an architectural design method and a building based on the method that induces this fluctuation. Proposing Hanare in Tateyama as a trial design based on the design method. Then re-proposing the design method from the Hanare and as the main design, I designed a house. In addition, I proposed an architecture that does not merely dominate perceptions (fluctuations in the outer edges of everyday life), but rather establishes them.

目次	
梗概	p.007
第1章 序論	p.013
1.1. 研究の背景と目的	
1.2. 研究方法	
第2章 日常の外縁のゆらぎの定義	p.015
2.1. 日常の定義	
2.2. 物の構造	
2.3. 認識の枠組みと日常の外縁のゆらぎ	
2.4. 観察とは何か	
2.5. 日常の外縁のゆらぎを誘発する建築	
第3章 設計手法の提案	p.027
3.1. 物の選定	
3.2. フレーミング	
3.3. 敷地や要望への応答	
第4章 試設計	p.031
4.1. 対象敷地	
4.2. プログラム	
4.3. 館山のハナレ	
第5章 設計手法の再提案	p.059
5.1. サンプリング・ビジュアライジング	
5.2. 指向空間の打ち消し	
5.3. 分析結果	
第6章 本設計	p.063
第7章 まとめ	p.103

参考文献

p.107

謝辭

p.109



梗概

# 日常の外縁のゆらぎを誘発する建築

—物の様相を空間に帯びさせる設計手法—

坂牛研究室

4120546

山口 海

## 1. 序論

### 1.1. 研究の背景と目的

観察とは対象への認識を反復することで対象をより深く理解する行為である。現代生活において、観察は滅多に行われていないように思う。しかし他者を理解し自己の感覚が相対化される契機をもつ点で観察は非常に価値のある行為であると考えられる。

観察とは非日常的行為であるが、現代生活でも観察に近いことが行われている。それは観察という行為には満たない「日常の外縁のゆらぎ」である。日常を揺さぶり、その外縁に変化をもたらさうる感覚。観察への契機をもつこの感覚を、建築を通して刺激することはできないだろうか。

本研究では日常の外縁のゆらぎを主体の認識の枠組みの内に定義し、これを誘発する建築の設計手法と手法に基づいた建築の提案を行うことを目的とする。

### 1.2. 研究方法

2章では本研究における日常の外縁のゆらぎとそのゆらぎを誘発する建築を定義する。3章では2章に基づく設計手法を提案し、4章で試設計を行う。ここで設計した建築物は実際に建てられた。5章では試設計に基づいた設計手法の再提案をし、6章で本設計として住宅を設計する。

## 2. 日常の外縁のゆらぎの定義

### 2.1. 日常の定義

鷺田清一の『想像のレッスン』の次の一説<sup>註1)</sup>を日常を定義するための手がかりとする。

「日常の知覚はつねに運動のなかにある。何かをさぐり、さまよっている。が、わたしたちが眼にとめるのは、記号やモノといった、意味の薄膜に覆われた形象ばかりだ。(…)わたしたちの日常は、見ているつもりで、じつは見えていないものだらけなのだ。」

ここでは日常をモノの集積であると定義する。

### 2.2. 物の構造

日常の定義にある物(モノ)とは何か。物は3つの様態をもつ。①物:物そのもの、わたしたちは物そのものを認識しえない。②物の様相:主体が認識できる物の性質の総体があらず物の有り様。物の様相は一刻一刻と変化する。③モノ:主体が付加する意味によって物の様相から抽象され立ち現れる形象、または記号。

### 2.3. 認識の枠組みと日常の外縁のゆらぎ

主体はある刺激を認識したとき生活認識、日常の外縁のゆらぎ、コミュニケーションのいずれかの方法で刺激を処理する。

生活認識とは知識や習慣によって、認識した刺激を収束<sup>註2)</sup>させることである。これはわたしたちの日常を円滑に進めるための認識である。

日常の外縁とはモノの集積である日常の、厚みをもった輪郭のことである。この外縁に変化をもたらさうる感覚を日常の外縁のゆらぎと定義する。

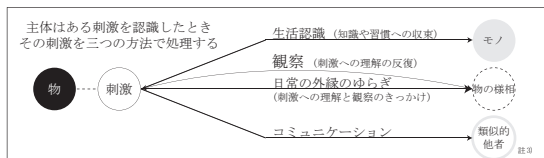
物をモノとしてではなく、物の様相として認識したとき、もとにあったモノと新たに認識した物の様相との差が日常の外縁のゆらぎを生む。そして観察とは、日常の外縁のゆらぎにはじまり、刺激への認識と理解を反復することである。

またコミュニケーションとは主体が刺激との類似的側面を認め、その刺激との意思疎通を図ろうとすることである。<sup>註3)</sup>以上の内容を図1、図2にまとめる。

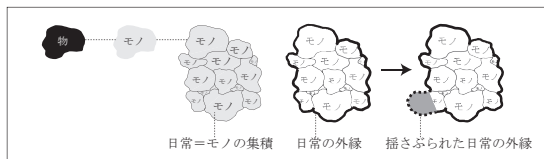
### 2.4. 日常の外縁のゆらぎを誘発する建築

物は私たちが付加する意味とは無関係に存在する。したがって度々異なる雰囲気や意味を受け取る。私たちはその変化を日常の外縁のゆらぎとして感じ取り、観察する契機を得られると仮定する。

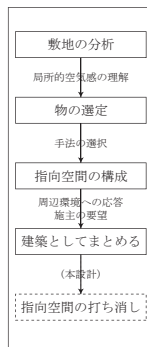
日常の外縁のゆらぎを誘発するためには、物の様相



▲ 図1 認識の枠組み



▲ 図2 日常の外縁のゆらぎ



▲ 図3 手法

▼ 表1 選定した物の一覧

建築物	対象物	手法	構成方法	建築物	対象物	手法	構成方法
ハナレ	ソテツ	F	B	住宅	隣壁	V,S	D
	竹藪	F	C		RC住宅	F	D
住宅	シンメトリカルな住宅	F	B	RC住宅	構造グリット	V	D
	コンクリートブロック壁	F	A		開口幅	S	C
住宅	ソテツ	F,S	B	RC住宅	スラブ高さ	S	C
	竹藪	F,S	C		仕上げ	S	C
住宅	シンメトリカルな住宅	F,V	B	木造住宅	木造住宅	F	B
	コンクリートブロック壁	F,S	A		構造グリット	V	B
住宅	ハナレ	V	D	木造住宅	開口幅	V	A
	ダンチク	S	C		屋外手すり	S	A
住宅	坂道(私道)	V	D	外構	レンガ風タイル	S	A
	トタン屋根	V,S	C		外構の白タイル	S	A



を感じられる空間が必要である。そのため空間に物の様相を帯びさせる必要がある。この空間を指向空間と定義する。

様々な物の指向空間を重ねることで日常の外縁のゆらぎを誘発する建築を設計する。指向空間の具体的な構成方法を図4に示す。物のスケールと物と敷地との距離によって各構成方法を分類した。

### 3. 設計手法の提案

敷地の分析を通して物を選定し、その物に見合う指向空間を構成、空間同士を建築としてまとめる。図3に設計の流れを示した。

#### 3.1. 物の選定

物の選定にあたって敷地の地形、気候、植生、生態、歴史、周辺環境などから敷地の局所的空気感<sup>註4)</sup>を理解する。敷地にいつでも存在し、敷地の局所的空気感をもつ物、あるいはそれに関わる物を選定する。設計時に対象にした物とそれぞれの物に適用した手法と構成方法を表1にまとめる。

#### 3.2. フレーミング

指向空間をつくる第一の手法としてフレーミングを提案する。フレームとフレーム周辺での、選定した物へ

の視覚誘導と、物の様相そのものを共有すること<sup>註5)</sup>で、物の様相を主体に強く認識させることをフレーミングと定義する。

### 3.3. 敷地や要望への応答

指向空間は様々なできあがるが、その中で敷地の自然条件や隣地との関係、そして施主の要望に沿って指向空間を一つの建築としてまとめる。

### 4. 試設計

#### 4.1. 対象敷地

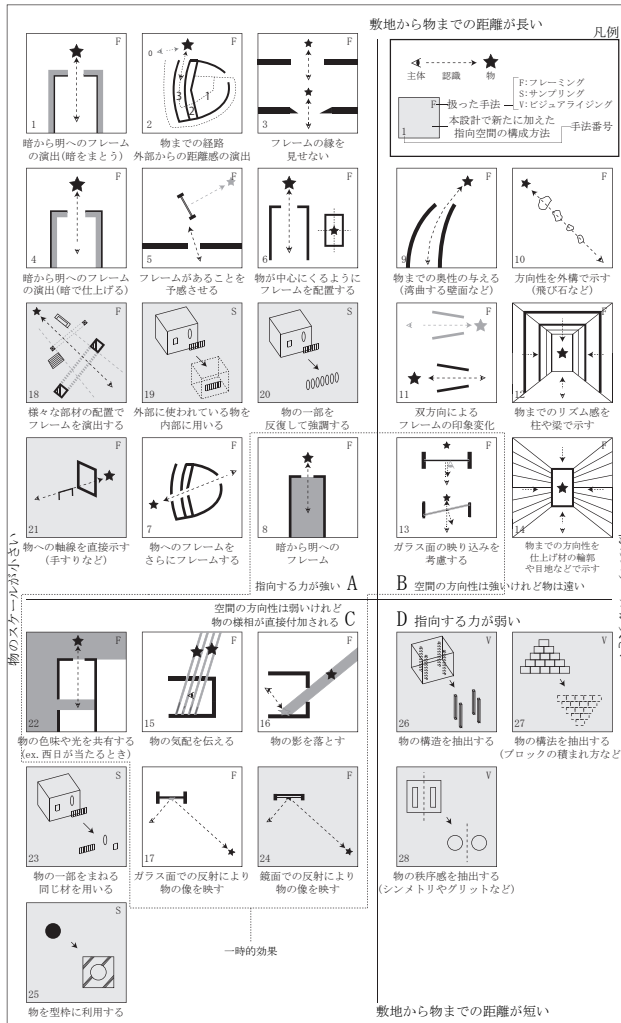
千葉県館山市の南西部に位置する、閑散とした港町と別荘地との間にある、小さな集落の一角。空き家が多く、2019年の台風15号からの復興も半ばで、数年もの間、誰にも手入れされていなかった土地である。

#### 4.2. プログラム

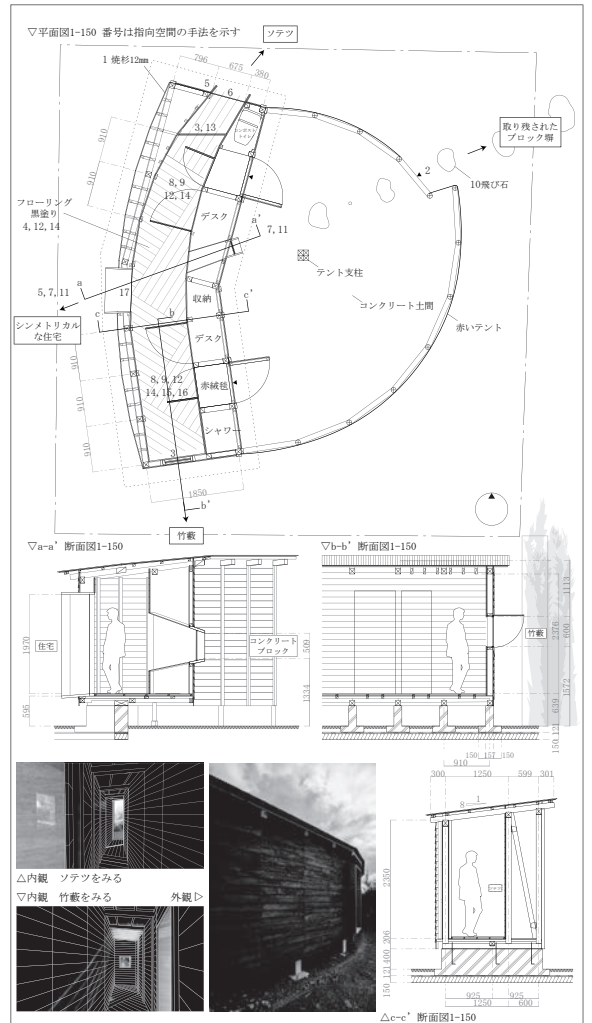
東京の自宅から遠く離れた小さなハナレの設計を依頼された。忙しい日常から距離をおき、本を読んだり、のんびりと過ごしながらか、自己を内省するような場が求められた。

#### 4.3. 館山のハナレ 図4

ここではソテツ、竹藪、台風被害にあった住宅の解体時に取り残されたブロック塀、敷地からシンメトリカ



▲ 図4 指向空間の構成方法



▲ 図5 館山のハナレ

ルにみえる住宅の四つを試設計で対象とする物として選定した。指向空間を構成しつつ、西側からの強い海風を受け流すことを念頭に、建築が湾曲するように指向空間をまとめた。またその結果生まれる東側の空地を土間空間としてテントで覆うことで半屋外での活動を求めた施主の要望を満たした。

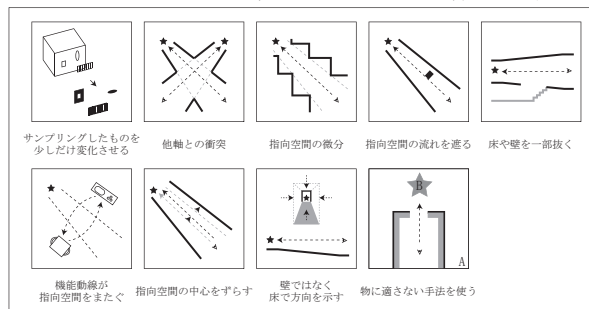
## 5. 設計手法の再提案

館山のハナレでの設計手法を見直し再提案する。ハナレでは対象にした物への指向する力が非常に強い。ハナレという日常的に使われない建物においては、その力が主体にもたらす感覚に直結するめ、指向する力の強い空間が有効であると考ええる。しかし住宅など日常的に使われる建物では、主体が指向している対象に慣れてしまうことから、少ない数の強い指向空間を求めるよりも、数多くの弱い指向空間を設けることが有効的であると考ええる。

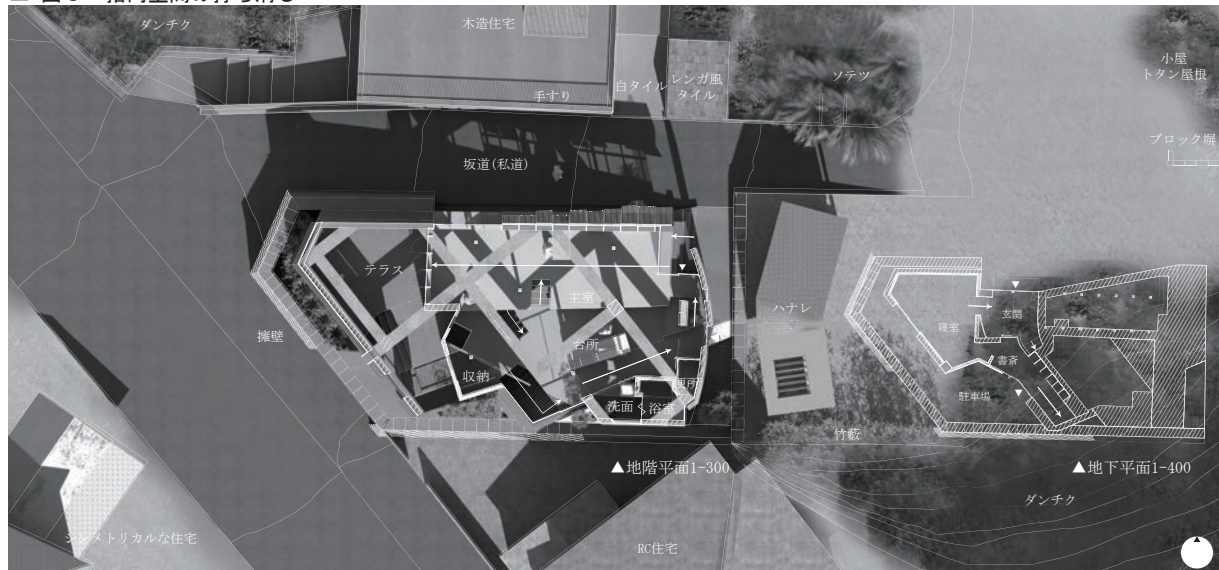
そこで強すぎる指向空間を打ち消す操作に加え、指向する対象を増やし、さらに指向空間の種類を増やすためにフレーミングと並列して他の手法も取り入れることを提案する。

### 5.1. サンプリング・ビジュアライジング

フレーミング以外の手法としてサンプリングとビジュアライジングを提案する。サンプリングとは物の様相を空間に直接付加することである。物の一部をそのまま取り込むことや、物そのものを型枠の一部とし



▲ 図6 指向空間の打ち消し



▲ 図7 本設計 配置図

て利用することなどが例として挙げられる。ビジュアライジングは物の様相を寸法に落とし込むことである。物の構造や秩序感を抽出し、その構成を明らかにしながら参照することなどが例として挙げられる。

### 5.2. 指向空間の打ち消し

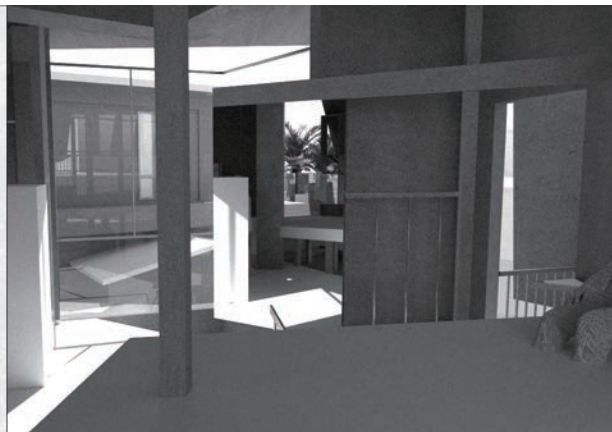
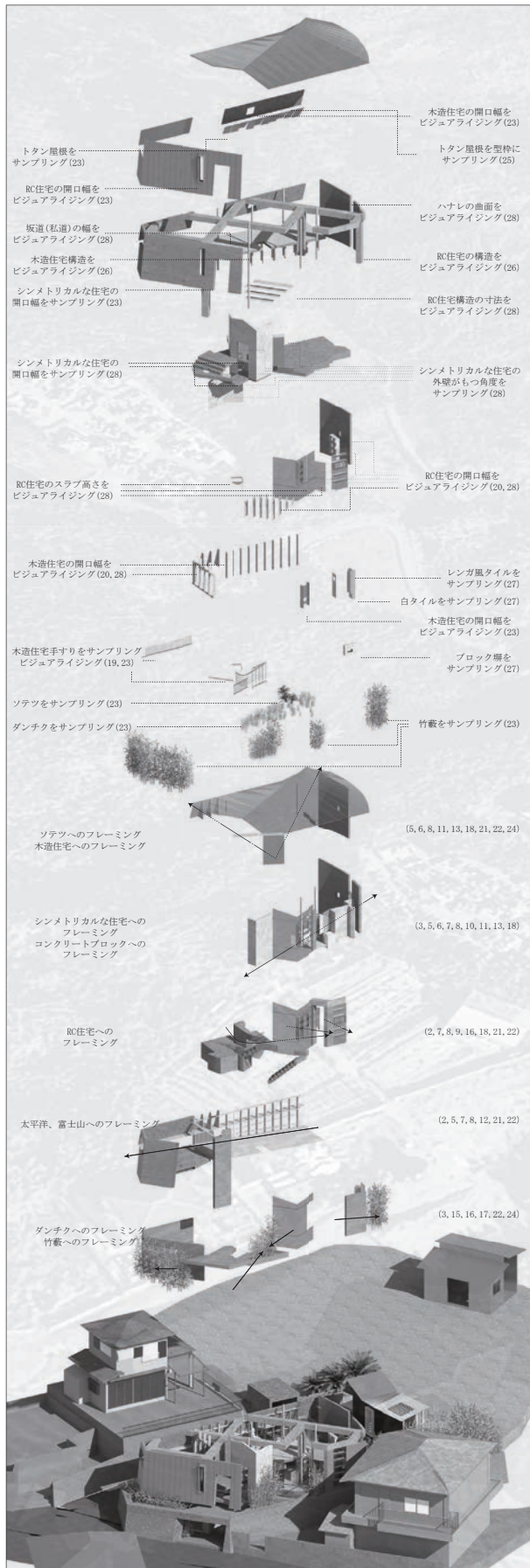
指向空間を取り込みながら、指向空間の軸をずらすことや、指向空間の流れを遮ることで、指向する力を弱め、空間を重層させ空間に奥行を与える。図6に打ち消しのダイアグラムをまとめた。

## 6. 本設計 図7

館山のハナレの施主が定年後、施主の所有するハナレの目の前の敷地に東京から移住すると想定し、住宅を設計する。施主の要望はハナレではかなわなかった海の見えるテラスとハナレの居室とは対照的な大きな居室である。ハナレで扱った物と敷地周辺からさらに物を選定し、指向空間を構成しながら、それらの指向を同時に打ち消していくことで設計を進めた。エントランスから海の見えるテラスまで大きく回遊する動線で、様々なちりばめられた指向空間をまとめた。

## 7. まとめ

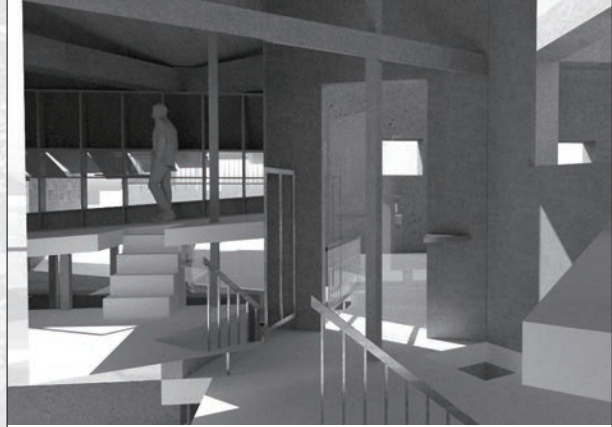
本研究では日常の外縁のゆらぎを認識の枠組みの内に定義し、それを誘発する設計手法を提案した。またその手法を再提案することで、単に認識(日常の外縁のゆらぎ)を支配するのではなく、あくまでも認識を支えるような建築を提案した。



△対象となったソテツが室内に映し出される フレーミング



△ハナレから引き継いだシンメトリカルな住宅への指向空間を崩しつつ残す フレーミング



△シンメトリカルな住宅の外壁角度を仕切り壁と鏡の角度に適用する ビジュアルライジング



△RCと木造の住宅からの構造が場所を規定する サンプリング



## 第 1 章

### 序論

## 1.1. 研究の背景と目的

観察とは対象への認識を反復することで対象をより深く理解する行為である。現代生活において、観察は滅多に行われていないように思う。しかし他者を理解し自己の感覚が相対化される契機をもつ点で観察は非常に価値のある行為であると考え。註1

観察とは非日常的行為であるが、現代生活でも観察に近いことが行われている。それは観察という行為には満たない「日常の外縁のゆらぎ」である。忙しい現代生活ではすぐに淘汰されてしまうような、行為には満たない感覚。しかし日常を揺さぶり、その外縁に変化をもたらさうる感覚である。観察への契機をもつこの感覚を、建築を通して刺激することはできないだろうか。

本研究では日常の外縁のゆらぎを主体の認識の枠組みの内に定義し、これを誘発する建築の設計手法と手法に基づいた建築の提案を行うことを目的とする。

## 1.2. 研究方法

2章では本研究における日常の外縁のゆらぎとそのゆらぎを誘発する建築を定義する。3章では2章に基づく設計手法を提案し、4章で試設計を行う。ここで設計した建築物（館山のハナレ）は実際に建てられた。5章ではこの試設計に基づいた設計手法の再提案をし、6章で本研究における本設計として住宅を設計する。

### 【脚注】

1) 2.4. にて詳しく論じる。

## 第2章

### 日常の外縁のゆらぎの定義

## 2.1. 日常の定義

日常の外縁は日常の定義によって変化する。註2

ここでは鷺田清一の『想像のレッスン』の次の一説を日常を定義するための手がかりとする。

「日常の知覚はつねに運動のなかにある。何かをさぐり、さまよっている。が、わたしたちが眼にとめるのは、記号やモノといった、意味の薄膜に覆われた形象ばかりだ。だが、そのときわたしたちは、表示された、あるいはモノを粹どる意味を見ているだけであって、物を見ているわけではない。ありふれたモノとしてその意味をかすめつつ、物にはふれずに通り過ぎる。わたしたちの日常は、見ているつもりで、じつは見えていないものだらけなのだ。」註3

本研究においては日常をモノの集積であると定義する。

### 【脚註】

2) 本研究では日常をモノ (2.2.以降で論ずる) の集積と定義している。しかし日常を他の方法で定義することも可能であり、その場合日常の外縁の定義も変化する。ダニエル・N・スターンは『乳児の対人世界』註4において自己感の形成を、感覚、欲動、情動、言語の四つの回路の複合的作用であると捉えた。ここで言われている自己感とはわれわれの経験様式の、主観的な側面に注目した、組織化の形態のことである。モノの集積とは物をモノとして抽象する作用を経験様式の組織化の形態のことである。同様にして日常を他の経験様式の組織化の形態として論ずることができれば、その外縁を定義することが可能になる。

尚、十川幸司はダニエル・N・スターンの四つの回路をひきながら、新たな自己感の形成を精神分析の要として論を進めている。註5

3) 参考文献 1 p.76-77

4) 参考文献 2 理論編・臨床編

5) 参考文献 3 p.54-



## 2.2. 物の構造

日常の定義にある物（モノ）とは何か。本研究では物は3つの様態をもつ。

- ①物：物そのもの、わたしたちは物そのものを認識しえない。註6
- ②物の様相：主体が認識できる物の性質（形態、雰囲気、色味、影、粘度、湿度、密度、構築性など）の総体があらわす物の有り様。物の様相は一刻一刻と変化する。註8
- ③モノ：主体が付加する意味によって物の様相から抽象され立ち現れる形象、または記号。

### 【脚註】

6) イマヌエル・カントは『純粹理性批判』（註7）において、対象とは客観的に存在するのではなく、主体の認識が対象を成立させることを論じ、事物を「経験の対象」である現象としての事物と、「可能的経験の限界」を超えた「物自体そのもの」とに区分した。本研究では後者の物自体そのものを「物」として定義した。

7) 参考文献4 p.26-, p.42-

8) 菅木志雄は『世界を〈放置〉する ものと場の思考集成』（註9）において、物は物が占める空間の総体であるとしている。物是有用、無用に関係なく、質量、カタチ、構造、周囲の事物とのせめぎあい、現前してそこにあると論じている。本研究ではこの物の有り様を、物の様相と義している。

9) 参考文献5 p.22

### 2.3. 認識の枠組みと日常の外縁のゆらぎ

主体はある刺激を認識したとき生活認識、日常の外縁のゆらぎ、コミュニケーションのいずれかの方法で刺激を処理する。

生活認識とは知識や習慣によって、認識した刺激を収束<sup>註10</sup>させることである。これはわたしたちの日常を円滑に進めるための認識である。<sup>註11</sup>

日常の外縁とはモノの集積である日常の、厚みをもった輪郭のことである。<sup>註13</sup>この外縁に変化をもたらしうる感覚を日常の外縁のゆらぎと定義する。

物をモノとしてではなく、物の様相として認識したとき、もとにあったモノと新たに認識した物の様相との差が日常の外縁のゆらぎを生む。そして観察とは、日常の外縁のゆらぎにはじまり、刺激への認識と理解を反復することである。

またコミュニケーションとは主体が刺激との類似的側面を認め、その刺激との意思疎通を図ろうとすることである。<sup>註13</sup>

以上の内容を図1、図2にまとめる。

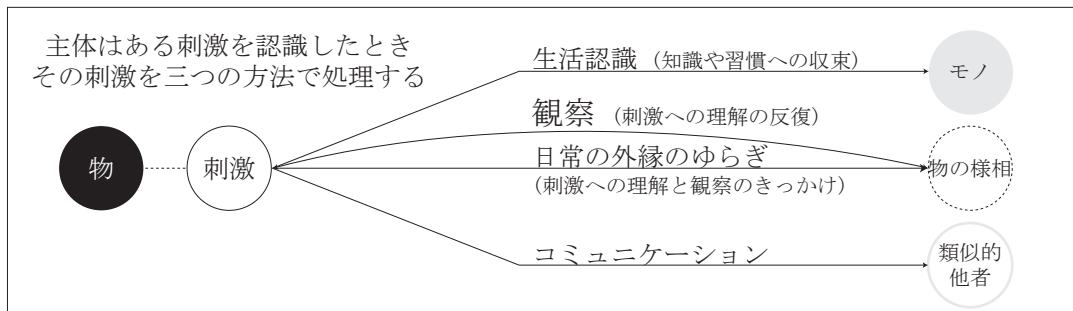
#### 【脚註】

10) 刺激を認識した主体は、その刺激を処理するために刺激を理解する必要がある。しかし日常生活では、その刺激をすでに知識としてもっていたり、その刺激を何度も認識していることから刺激に慣れ、無意識に処理される場合がほとんどである。そういった刺激の処理方法を刺激を収束するところでは定義している。國分功一郎は『暇と退屈の倫理学』(註11)において退屈することがもたらす人間的自由の本質を論じ、習慣が大きな要因をもたらすとしている。習慣とはある現象がもつ反復構造を発見し、予測をたて、そのサリエンシー(刺激)にかかるエネルギーを温存し、何かを理解するという複雑な手続きから人間を解放してくれるとした。

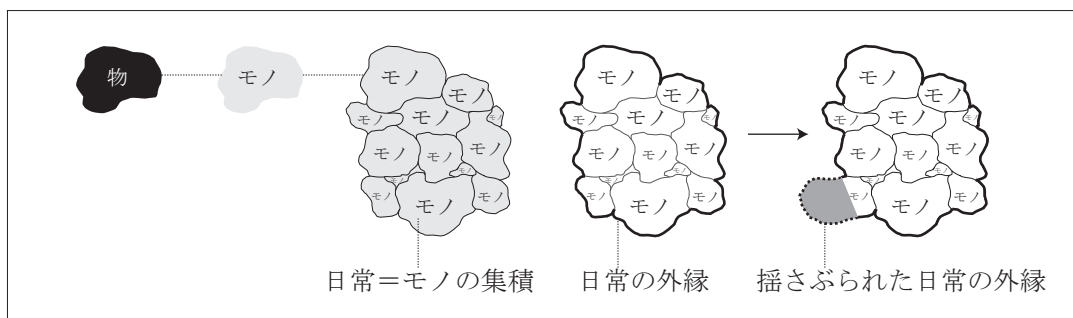
11) 参考文献6 p.299,337,368,417

12) 大澤真幸は『コミュニケーション』(註13)において人間同士のコミュニケーションがどのようにして成立するのかを探求するにあたって、ポール・グライスの関連性理論を紹介している。第一に不確実なコンテクスト的な想定を確定化すること。第二にコンテクスト的想定と矛盾し誤った想定を放棄すること。第三にコンテクスト的想定と結びついて新情報を論理的に導きだすこと。これらの機能を最大化するように人間の認知は働くことを提唱した理論である。コミュニケーションにおいてはこの関連性理論が重要であり、様々な無関係な事項を効率的に区別し選択するには無視することが必要だとした。ここで無視するとは後続する出来事に対して、それらがこれまでの経験と「同じ」である、ということを取捨する態度であるとした。この無視する能力を本研究では生活認識と定義している。

13) 参考文献6 p.44,120,177



▲ 図1 認識の枠組み



▲ 図2 日常の外縁のゆらぎ

【脚註】

14) 日高敏隆は『動物と人間の世界認識』(註15)においてヤーコブ・フォン・ユクスキュルの環世界(註17)概念をひきながら、「人間以外の動物たちも、身の回りの環境のすべてを本能によって即物的にとらえているわけではない。…環境の中いくつかのものを抽出し、それに意味を与えて自らの世界認識をもち、その世界の中で生き、行動している。その環世界は「客観的」に存在する現実のものではなく、あくまで主体によって「客観的」な全体から抽出、抽象された、主観的なものである。…それをイリュージョン(illusion)と呼ぶことにした。」また國分功一郎は『暇と退屈の倫理学』(註16)において「世界体験の中で次々に立ち上がる事象のうち、もっとも再現性の高く反復される事象系列群こそが、「身体」の輪郭として生起する」としている。本研究ではこの「イリュージョン」や「身体の輪郭」日常の外縁として定義している。つまり日常の外縁のゆらぎとは何らかのきっかけにより、その世界認識(イリュージョン、輪郭)が壊されることを指す。

15) 参考文献7 p.16

16) 参考文献6 p.418,420

17) 環世界とは1930年代にヤーコブ・フォン・ユクスキュルが提唱した概念である。それぞれの動物が知覚し作用する世界の総体がその動物にとっての環境であるとし、その環境をその動物の環世界であると定義した。参考文献9 國分功一郎は『暇と退屈の倫理学』(註18)において人間の本質的自由とはこの環世界を容易に移動する能力から生じる退屈のことであるとしている。

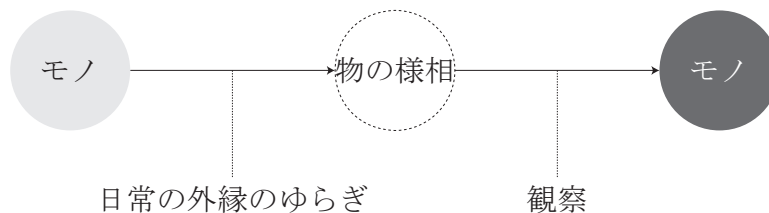
18) 参考文献6 p.298,299,347

19) ある刺激を前にしたとき、私たちはその刺激に対して何らかの類似性を感じたときにコミュニケーションという刺激の処理方法をとる。ドゥルーズの『21世紀』(註20)において國分功一郎は、熊谷普一郎と綾屋紗月の自閉症当事者研究から、ドゥルーズの無人島論を引き合いにだし、いままで絶対的に異なる他者を想定してはたはずの他者性は、実際は人間にしか認められていなかったことについて言及し、他者性は主体との類似的側面から開かれるべきだと主張し、主体が対象との類似的側面を認めることで生じる他者を類似的他者と定義している。

20) 参考文献10 pp.157,158

## 2.4. 観察とは何か

「観察とは対象への認識を反復することで対象をより深く理解する行為である。現代生活において、観察は滅多に行われていないように思う。しかし他者を理解し自己の感覚が相対化される契機をもつ点で観察は非常に価値のある行為であると考え。」と1.1. で論じた。



上図はある主体にとってのある物に対する認識の変化を表す。主体のなかでモノとして位置づけられていた物は、日常の外縁のゆらぎから物の様相として認識される。そして物の様相として捉えられた物は従来のモノへと再び戻るか、あるいは観察を通して新たなモノとして主体の認識に位置づけられる。本研究の目標は物を物の様相として感じるための、日常の外縁のゆらぎを誘発する建築をつくることにあるが、ここで本研究における観察という行為を現代思想の潮流のなかで捉えなおし、観察することが主体にもたらす効果について論じる。

### 2.4.1. 思弁的实在論 Speculative Realism

21世紀の大陸哲学において、新たな实在論が台頭している。カンタン・メイヤスーの『有限性の後で』<sup>註21</sup>が2006年に出版され、それ以降メイヤスーやグレアム・ハーマンらによって提唱されている思弁的实在論 Speculative Realism（以下SR）である。この实在論者は相関主義を批判し、人間の思考の相関項としての实在ではなく、实在そのものについて語ることを試みている。

わたしたちは意識や言語をとおして、外部へと超越する。しかし、その外部はわたしたちの関係する限りにおいて存在するものにすぎない。それは相対的な外部でしかなく、絶対的な外部を語るができなくなっていることを指摘した。思弁的实在論とはこの外部である实在を思弁的に論ずる試みである。<sup>註22</sup>

#### 【脚註】

21) 参考文献 11

22) 参考文献 12

## 2.4.2. オブジェクト指向哲学 Object-Oriented Ontology

ここでSRの主要論者であるグレアム・ハーマンによる実在の描かれ方に注目する。ハーマンはオブジェクト指向哲学という立場を確立し<sup>註23</sup>、相関から独立した実在がもろもろの個体的な存在者から成り立つという主張をしている。

日常的に経験されるこの世界は、無数の個体的な対象で満ちている。これらすべてをそのまま保存し、個体的対象を中心とした存在論を構築しようとする。ハーマンはこの立場に対立する哲学的戦略を「下方解体」と「上方解体」とに区別している。下方解体の哲学とは、日常的な対象を、より根源的な実在とされるものへ還元する立場である。<sup>註24</sup>また上方解体とは対象をその上方の表層的なものへと還元する立場である。<sup>註25</sup>

ハーマンはこのどちらにも還元されない自立性を対象に与えることによって、日常的に出会われる対象を中心に据えた哲学を構築した。このさいに重要な役割を果たすのが、「退隠」(withdrawal, Entzug) という概念である。これは対象が他のあらゆる対象との関係から隠れているということを意味する。対象が他のものに対して示す側面は、ほんの一部にすぎない。対象は、還元不可能な自立的存在なのである。

たがいに退隠する対象は、直接的に関係することはできない。そこで代替的に関係させようとする方法として「代替因果」の論理が用いられる。ハーマンは対象を「実在的对象」と「感覚的对象」のふたつに分ける。後者が感覚的・指向的領域のうちに現前するものであるのに対して、前者はそこから退隠する実在としての対象である。実在的对象としてのわたしたちは、この感覚的对象を媒介にして、退隠する実在的对象としての日常にある物と間接的に関係することができるとした。

ところが、通常の知覚の場合、感覚対象は、偶有的な性質に覆われており、媒介としての役割を十全に果たすことはない。この偶有的性質はブラックノイズと呼ばれ、ホワイトノイズがカオスの性質であるのに対して、性質が構造化されているという含意で用いられている。さまざまな対象とのせめぎあいの中で生じるブラックノイズが圧力のように機能することで、感覚的对象に、ある特定の統一的な特徴が与えられる。こうした感覚対象は、ありふれた日常的なものとして現前する。

この知覚風景を一変させるものが「魅惑」(allure) である。情緒的衝撃として作用し、感覚的对象を媒介にすることで、汲みつくせない余剰をとどめた実在的对象と代替的に結びつくことができる。ただし、あくまで認識しているのは感覚的对象のみであり、実在的对象そのものは、つねに退隠する。魅惑は直接的に関係しえないものが存在するということを暗示するのである。このようにオブジェクト指向哲学は相関主義に陥らずに対象同士を関係させるモデルを提示してい

る。註27

本研究において、観察するとは、物を上方にも下方にも解体せず、実在的対象(物)を感覚的対象(物の様相)を媒介にして感じとり(日常の外縁のゆらぎ)、その対象をいまいちど捉えなおそうと能動的に認識を反復する事である。

#### 2.4.3. 観察が主体にもたらすこと

ジャック・ラカンは精神分析経験を条件づける三つの次元を提唱した。想像的なもの、象徴的なもの、現実的なものである。註29それぞれの次元は乳児が鏡像を通して、自己身体の統一像を獲得するまでの段階になぞらえて論じられている。

想像的なものの次元においては自己の内部と外部に亀裂をうむ。この亀裂により内部であるバラバラの身体像が、外部である鏡像鏡像に合わせて、自己を統一しようとする動きを引き起こす。これは同時に、内部にとっては外部へと自己が奪取される経験でもある。ラカンはこの外部を自我、それに対する内部を主体と定義している。主体が鏡像への同一化と疎外を繰り返し、自我が構成されていく次元である。

象徴的なものの次元においては、鏡像が自己身体像と一致するための他者の声が不可欠である。他者による名指しによる自己認識が象徴的なものの次元である。

現実的なものの次元は、鏡像が眼差しをもった主体的存在として、われわれの前に不気味にたちあらわれることをいう。鏡の中にふとしたきっかけで眼差しを発見するさいにあらわれる次元である。この次元を経験すると主体は解体の危機に瀕する。註31

このような三つの次元は、人間の経験様式一般に通底する側面があると同時に、精神分析の参照軸となりうるとラカンは考えている。

ここで、三つ目の次元は観察という経験が主体にもたらす変化であるとは言えないだろうか。観察が実在的対象を感覚的対象を媒介にして感じとり、その対象をいまいちど捉えなおそうとすることであるとすると、主体は観察する際に魅惑を通して感覚的対象への不信を感じ取ったはずである。この不信を抱く主体こそ、鏡像に映し出された眼差しをもった主体的存在ではないだろうか。つまり観察を通して主体は、主体がもつ対象への認識を相対化することができ、それによって自己の変容をもたらすのではないだろうか。註32

【脚註】

23) 参考文献 13

24) 下方解体の哲学には、さまざまなアルケーを見出すソクラテス以前の哲学や、シモンドンの「前個体的なもの」の哲学、ベルクソンやドゥルーズによる「生成の根源的流動」の哲学などが分類される。

25) ハーマンは上方解体の哲学には、「相関主義」(correlationism) と「関係主義」(relationism) を挙げている。関係主義とは具体的にはアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドとブルーノ・ラトゥールの著作に見出されるとしている。註 26

26) 参考文献 14 p.260

27) 飯盛元章は『連続と断絶：ホワイトヘッドの哲学』(註 28)において現代の思想潮流をまとめながら、ハーマンとホワイトヘッドの哲学との類似点について言及した。2.4.2. では本研究における観察をハーマンのオブジェクト指向哲学から位置づけたが、ホワイトヘッドの「有機体の哲学」にも同じように本研究における観察を位置づけられる。特に「現実的存在」の生成過程にあって、過去を自らの存在の基盤として吸収する「抱握」の概念を「積極的抱握」と「消極的抱握」にわけたとき、前者は本研究における観察と似た性質をもつ。参考文献 16

28) 参考文献 15 p.62,63

29) ジャック・ラカンはパラノイアの研究から出発し、精神分析経験を独自に拓いた分析家である。三つの超越論的次元は、様々な視点から検討されるが、この現象の発見はアンリ・ルロワなどがすでに記述していた。ラカンが独創的であったのは、この現象の論理化である。そのさい成人の分析経験ち思弁によって理論化を行っている。そして象徴的なものにおいてはソシュール、想像的なものにおいてはヘーゲル、現実的なものにおいてはハイデガーをそれぞれ援用し、ラカンなりの方法で論理化されている。(註 3 0)

30) 参考文献 3 p.18-21

31) フロイトは精神分析をとおしたこのような転覆作用をベストと呼んだ。参考文献 3 p.5

32) フロイトは精神分析をとおして、主体は自己を他者へと自らを開き、自己と他者との関係の中にゆだねるときに初めて自らの思考が変容していく契機を獲得するとしている。このような自己を他者との関係性の中へと移動することを転移と定義している。参考文献 3 p.35

## 2.5. 日常の外縁のゆらぎを誘発する建築

物は私たちが付加する意味とは無関係に存在する。したがって度々異なる雰囲気や意味を受け取る。私たちはその変化を日常の外縁のゆらぎとして感じ取り、観察する契機を得られる。

日常の外縁のゆらぎを誘発するためには、物の様相を感じられる空間が必要である。そのため空間に物の様相を帯びさせる必要がある。ここで、この空間を指向空間と定義する。

様々な物の指向空間を重ねることで日常の外縁のゆらぎを誘発する建築を設計する。指向空間の具体的な構成方法を図4に示す。物のスケールと物と敷地との距離によって各構成方法を分類した。

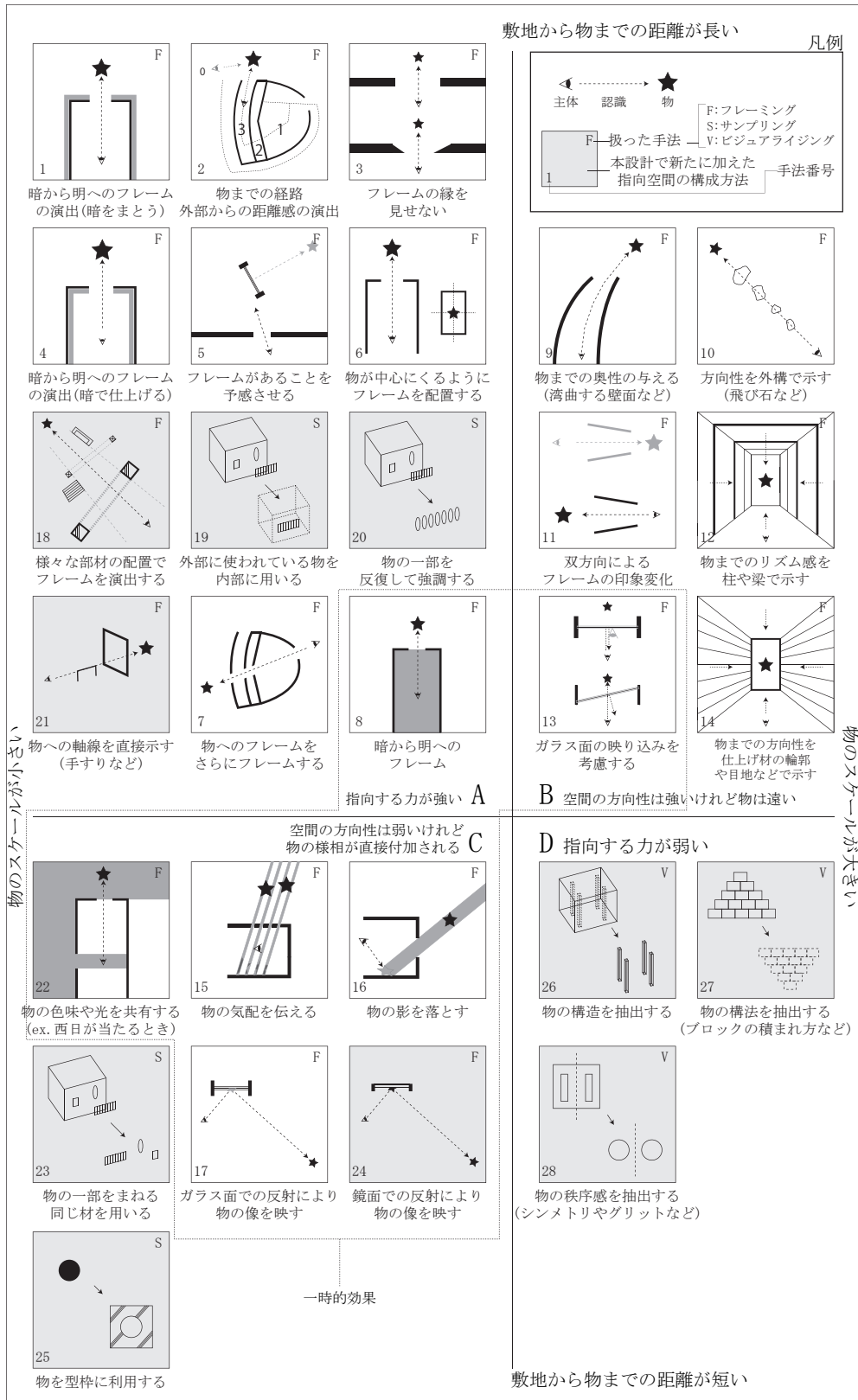
A: 指向する力が強い空間

B: 指向する空間の方向性は強いけれど物は遠い

C: 指向する空間の方向性は弱いけれど物の様相が直接付加される

D: 指向する力が弱い空間





▲ 図4 指向空間の構成方法



## 第3章

### 設計手法の提案

敷地の分析を通して物を選定し、その物に見合う指向空間を構成、空間同士を建築としてまとめる。図2に設計の流れを示した。

### 3.1. 物の選定

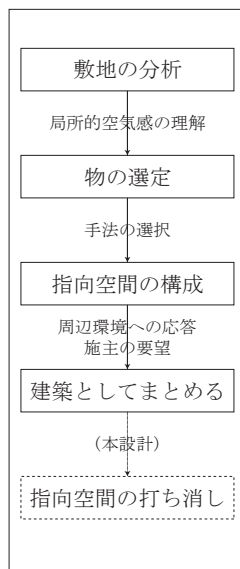
物の選定にあたって敷地の地形、気候、植生、生態、歴史、周辺環境などから敷地の局所的空気感<sup>註33</sup>を理解する。敷地にいつでも存在し、敷地の局所的空気感をもつ物、あるいはそれに関わる物を選定する。設計時に対象にした物とそれぞれの物に適用した手法と構成方法を表1にまとめる。

### 3.2. フレーミング

指向空間をつくる第一の手法としてフレーミングを提案する。フレームとフレーム周辺での、選定した物への視覚誘導と、物の様相そのものを共有すること<sup>註34</sup>であり、物の様相を主体に強く認識させることをフレーミングと定義する。<sup>註35</sup>一般にフレーミングとはある空間にいながら、その外側にある別の「空間」を感じさせるための設計手法だが、本研究におけるフレーミングとはある対象を明確に意識しながら、その対象にめがけて空間全体を構成することを指す。<sup>註37註38註39</sup>

### 3.2. 敷地や要望への応答

指向空間は様々なできあがるが、その中で敷地の自然条件や隣地との関係、そして施主の要望に沿って指向空間を一つの建築としてまとめる。



▲ 図3 手法

▼ 表1 選定した物の一覧

建築物	対象物	手法	構成方法	建築物	対象物	手法	構成方法
ハナレ	ソテツ	F	B	住宅	擁壁	V,S	D
	竹藪	F	C		RC住宅	F	D
	シンメトリカルな住宅	F	B		RC住宅 構造グリット	V	D
	コンクリートブロック塀	F	A		RC住宅 開口幅	S	C
住宅	ソテツ	F,S	B		RC住宅 スラブ高さ	S	C
	竹藪	F,S	C		RC住宅 仕上げ	S	C
	シンメトリカルな住宅	F,V	B		木造住宅	F	B
	コンクリートブロック塀	F,S	A		木造住宅 構造グリット	V	B
	ハナレ	V	D		木造住宅 開口幅	V	A
	ダンチク	S	C		木造住宅 屋外手すり	S	A
	坂道(私道)	V	D		外構のレンガ風タイル	S	A
	トタン屋根	V,S	C		外構の白タイル	S	A

【脚註】

33) 局所的空気感とは敷地の地形、気候、植生、生態、歴史、周辺環境などが複合的に主体に与える敷地の印象である。試設計および本設計における敷地の局所的空気感を得るために参考に撮影した敷地の風景を第4章にて示す。

34) 物の様相そのものの共有とは具体的には、外部にある物の影が室内に入り込む状況、また外部の物が特定の光に照らされているときに、同じ光が室内を照らしている状況で、その時室内にいる主体が物のもつ性質（ここでは光や影）に覆われていることを物の様相を共有していると定義している。

35) 菅木志雄は『世界を〈放置〉する ものと場の思考集成』において人ともとのが等価な比重をもち、個々のものの距離とその間の空間構造によって、人間はものと結び付けられるとし、ものそれ自体を感じ、ものがありながらその構造を感じさせない方法を〈状況〉と定義している。註36

36) 参考文献5 p.42

37) 平瀬有人は『フレーミングの平地および重層による建築空間の実践的研究』にて建築空間におけるフレーミング手法の系譜を示しながら、フレーミング手法を「穿たれた開口としてのフレーミング」「遮蔽するフィルターとしてのフレーミング」「鏡面による虚像のフレーミング」の3つに分類した上で、それらのフレームを並置・重層させることをマルチフレーミングとした。参考文献17

38) 原広司は『建築に何が可能か』にて有孔体の論理を提唱した。建築空間は空間単位、境界面としての被覆、作用因子、作用因子の運動を制御する孔から構成されるとし、建築設計とは「閉じた空間」に孔を穿つ行為となるとしている。参考文献18

39) クリスチャン・ノバルク・シュルツは『実存・空間・建築』にて3つの空間図式を指摘している。中心（＝場所）、方向（＝通路）、区域（＝領域）である。この方向（＝通路）は「奥行きへの連続性は、床、壁、天井という要素、もしくはこれらの要素の組み合わせたものを、分節化することによってつくられる」としている。この分節するものはフレーミングとなってその向こう側を表象するものでありこれもフレーミングであるといえる。参考文献19



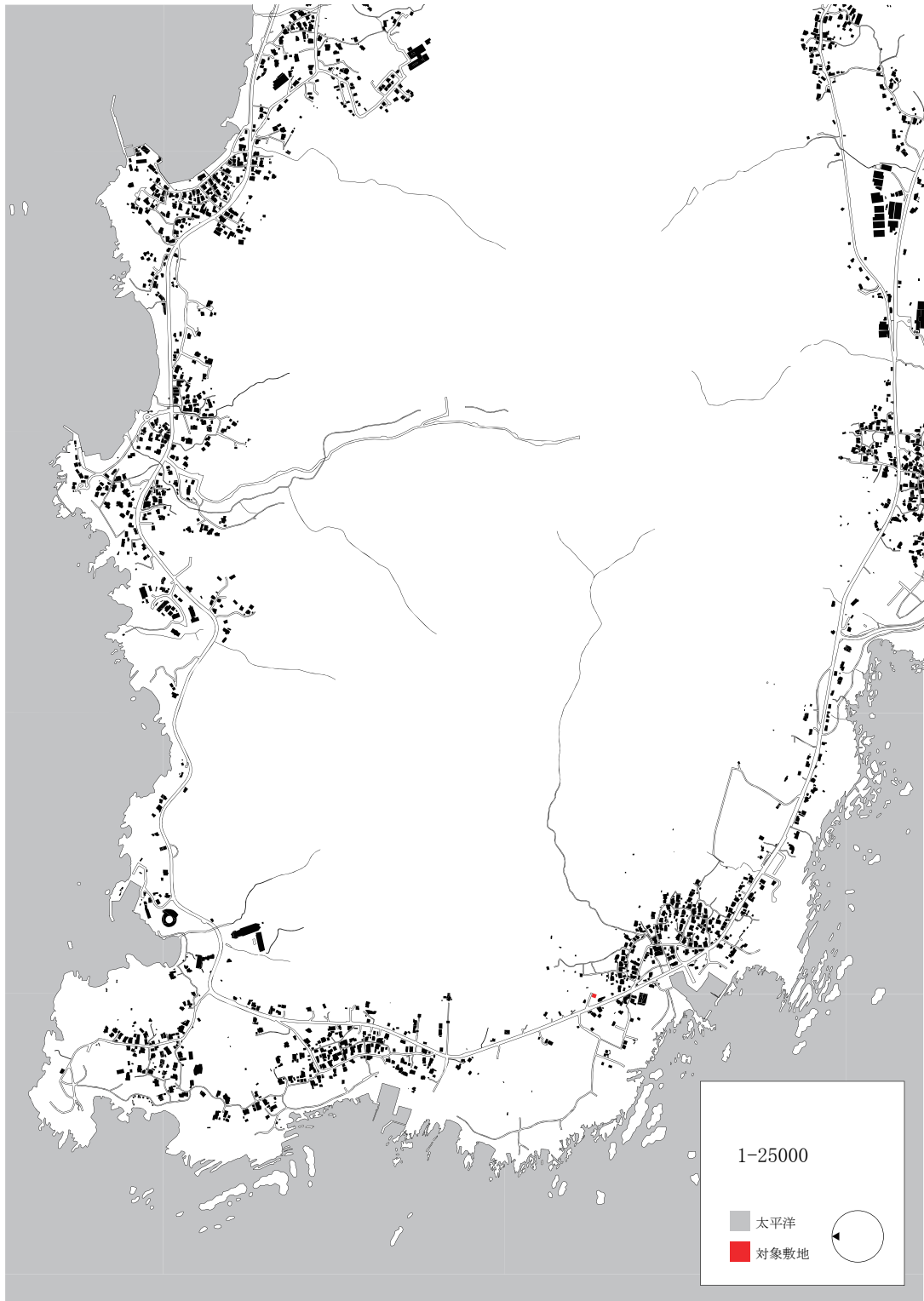
## 第 4 章

### 試設計

#### 4.1. 対象敷地

千葉県館山市の南西部に位置する、閑散とした港町と別荘地との間にある、小さな集落の一角。空き家が多く、2019年の台風15号からの復興も半ばで、数年もの間、誰にも手入れされていなかった土地である。

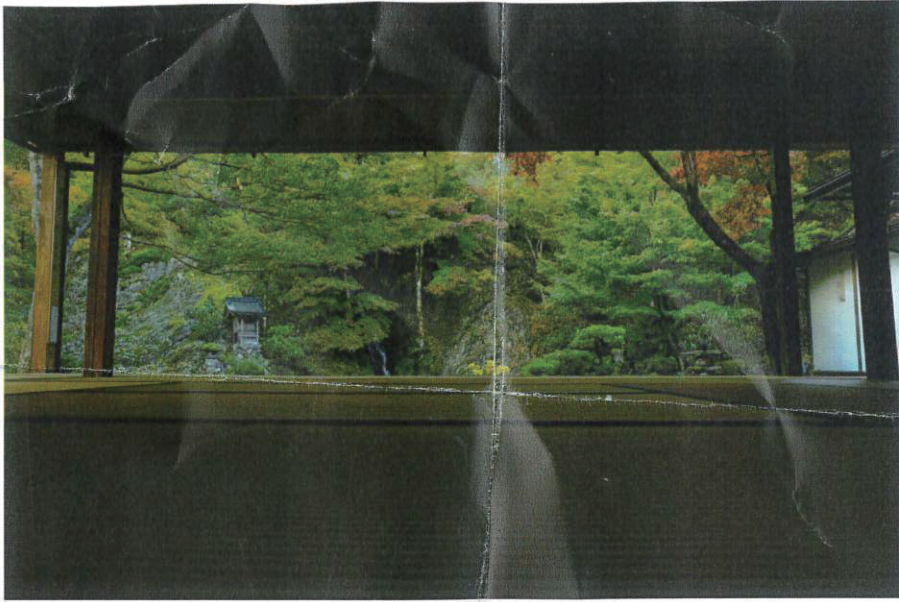




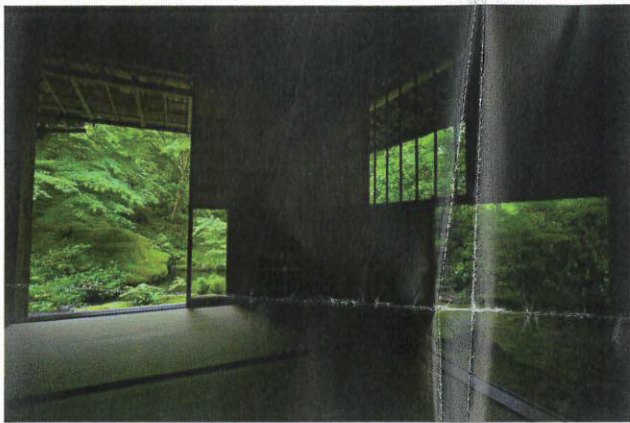
## 4.2. プログラム

東京の自宅から遠く離れた小さなハナレの設計を依頼された。忙しい日常から距離をおき、本を読んだり、のんびりと過ごしながら、自己を内省するような場が求められた。

右の写真は施主が提出したイメージ画像書である。



空宅



有江



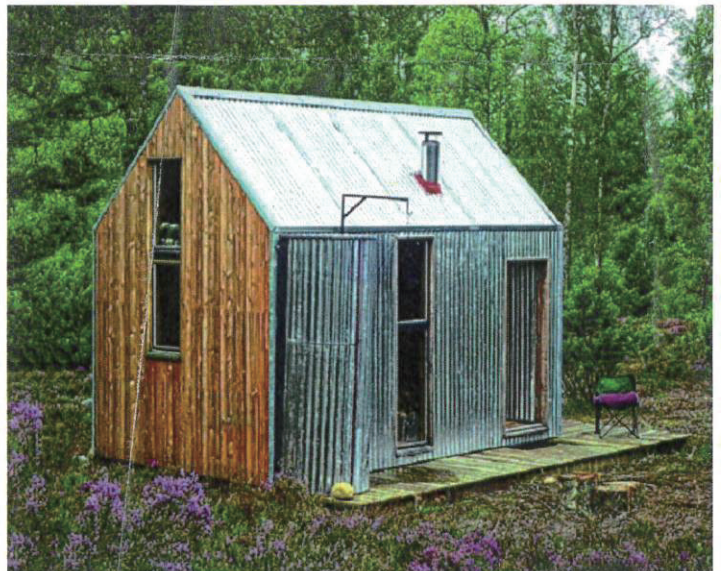
くら  
本 2階より  
たのしみ

海をのぞく

4



BBO  
2-3-2556



### 4.3. 館山のハナレ

ここではソテツ、竹藪、台風被害にあった住宅の解体時に取り残されたブロック塀、敷地からシンメトリカルに見える住宅の四つを試設計で対象とする物として選定した。

それぞれ対象にした物への指向空間を構成しつつ、西側からの強い海風を受け流すことを念頭に、建築が湾曲するように指向空間をまとめた。

またその結果生まれる東側の空気を土間空間としてテントで覆うことで半屋外での活動を求めた施主の要望を満たした。

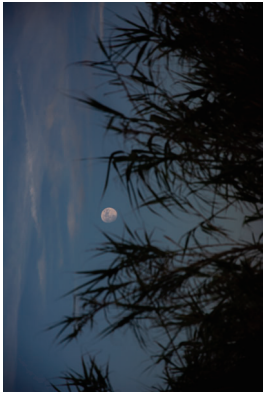
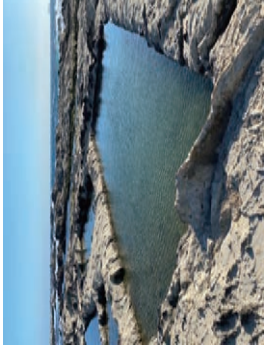
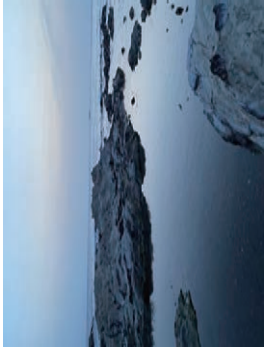
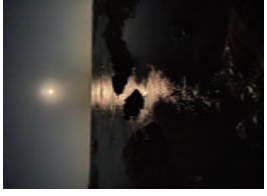
敷地の局所的空気感を得るために参考に撮影した敷地の風景を次ページに示す

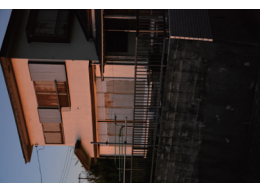
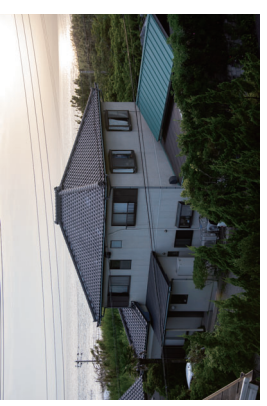
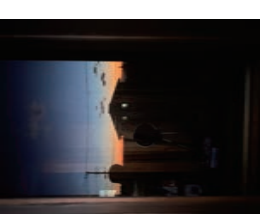
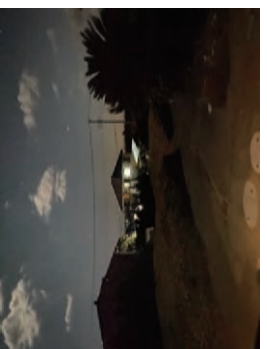
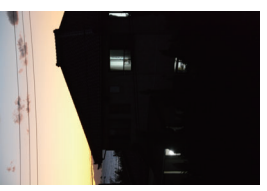
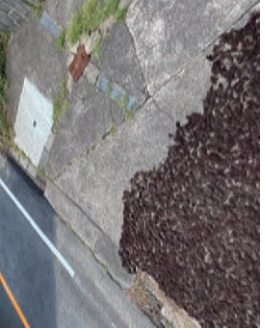
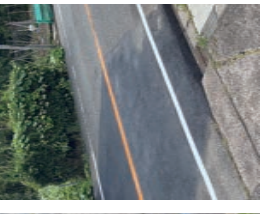
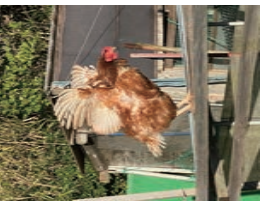
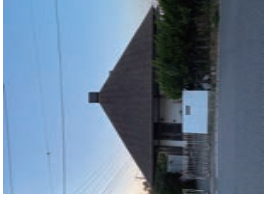
対象選定において重要視したキーワードは

地形 太平洋、VIEW、平砂浦、完新世の低地海岸段丘、貨物船、富士山、大島、裏山 / 植生 ストック、ポピー、菜の花、ダンチク、杉、豊富な植生、アオキ、ヒルザキツキミソウ、ホトケノザ、カラスノエンドウ、アメリカフウロ、ツタバウンラン、ムラサキケマン、サクラソウ、ススキ、ヤツデ、セージ、ネムノキ、シロツメクサ、ナズナ、ヘラオオバコ、コメツブツメクサ、竹、ソテツ、コニファー、ツタウルシ、セイヨウキヅタ、カントウタンポポ、ムラサキハナナ、スギナ、ルリムスカリ、モミジ、ゴールドクレスト、ハルノノゲシ、フラサバソウ、アロエ、ツルニチニチソウ、ホトケノザ、コルディリネ、スイセン、フラワーライン、のり、天草 / 生態 イノシシ、スズメ、シジュウカラ、ハクセキレイ、ウリボー、トンビ、ヤマガラ、メジロ、アマツバメ、ウグイス、キビタキ、カラス、家畜(鶏)、虫、ムカデ、モンシロチョウ、テントウムシ、クロアゲハ、ベニシジミ、チャバネセセリ、セイタカアワダチソウ、オオムラサキ、ルリシジミ、アカタテハ、アオスジアゲハ、アゲハチョウ、蛾、ウツボ、アオダイショウ、ヒミズ、ニホンザル、ためぎ、アナグマ、ハクビシン / 気候 日当たり、光、星空、音、匂い、風 / 周辺環境 微地形、坂、国道、杉浦邸の外構、ジアマ / 建築形式 2種類の擁壁、瓦屋根、はがれた塗装、継がれた手すり、トタンでの改修、構造体、開口部 / 構築物 アドホック、花壇、農地、地蔵、DIY、タイル、小屋 / 街並み 建ち方、植栽(自然との距離感)、ボリューム感、仕上げ / 歴史 フラワーライン、台風、伊勢海老、天草

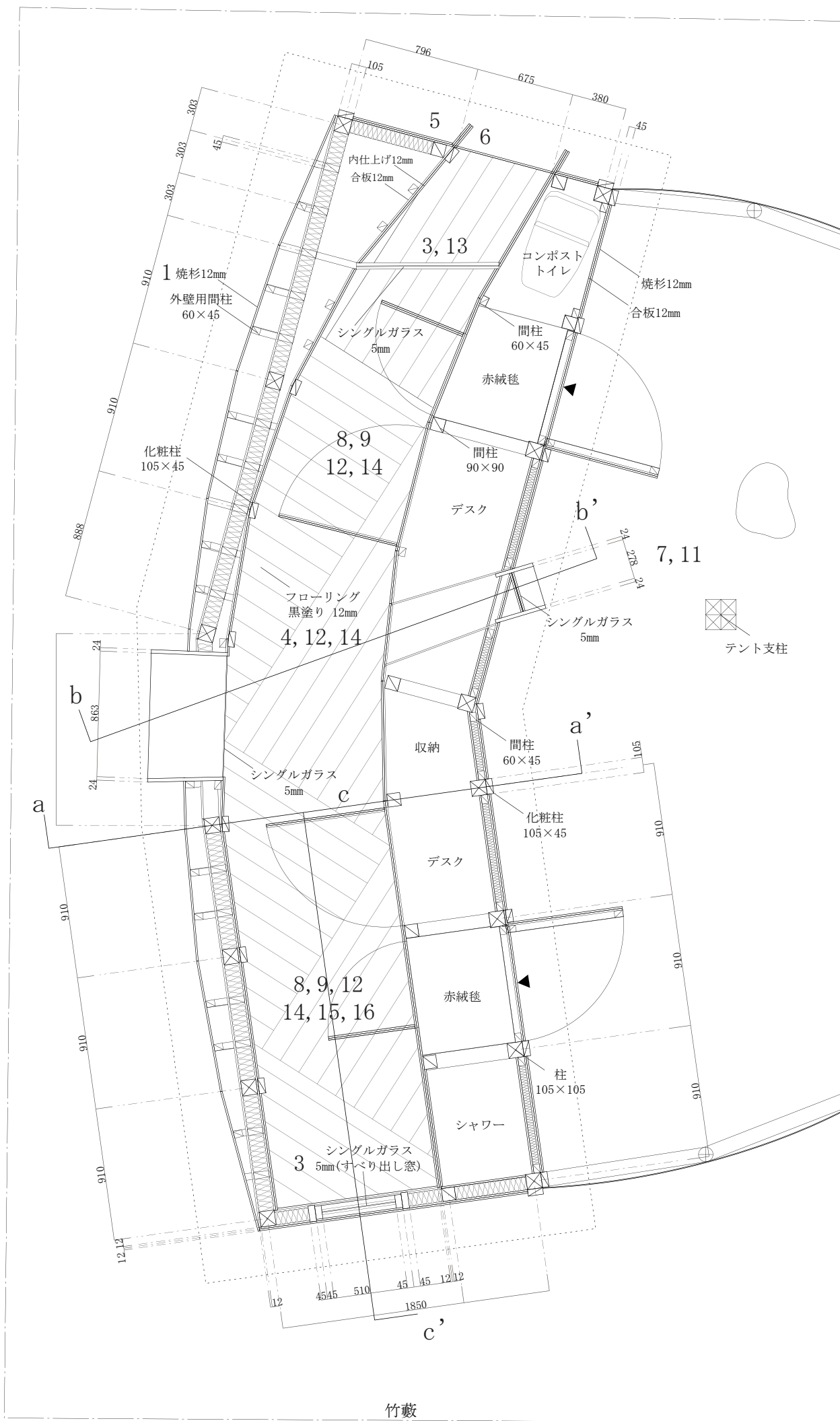
などである。



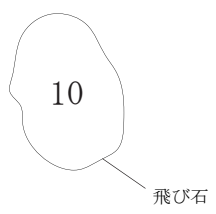
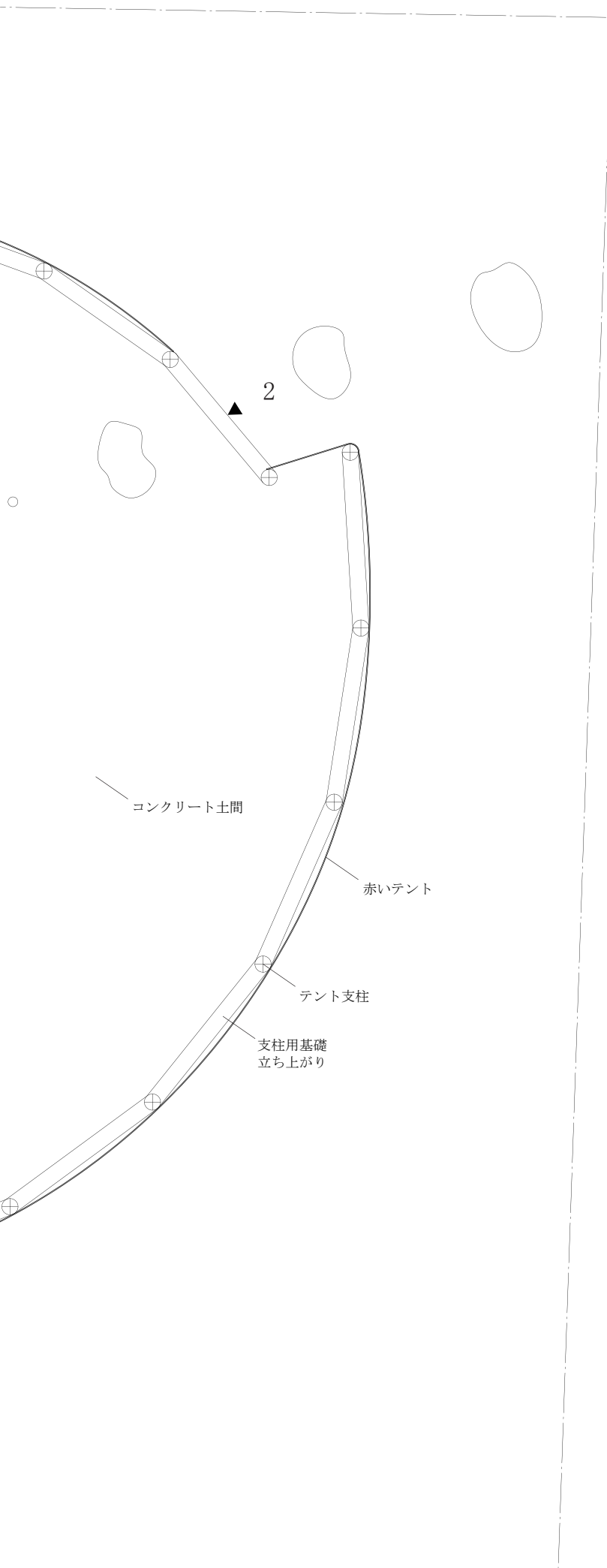




シンメトリカルな住宅  
海側







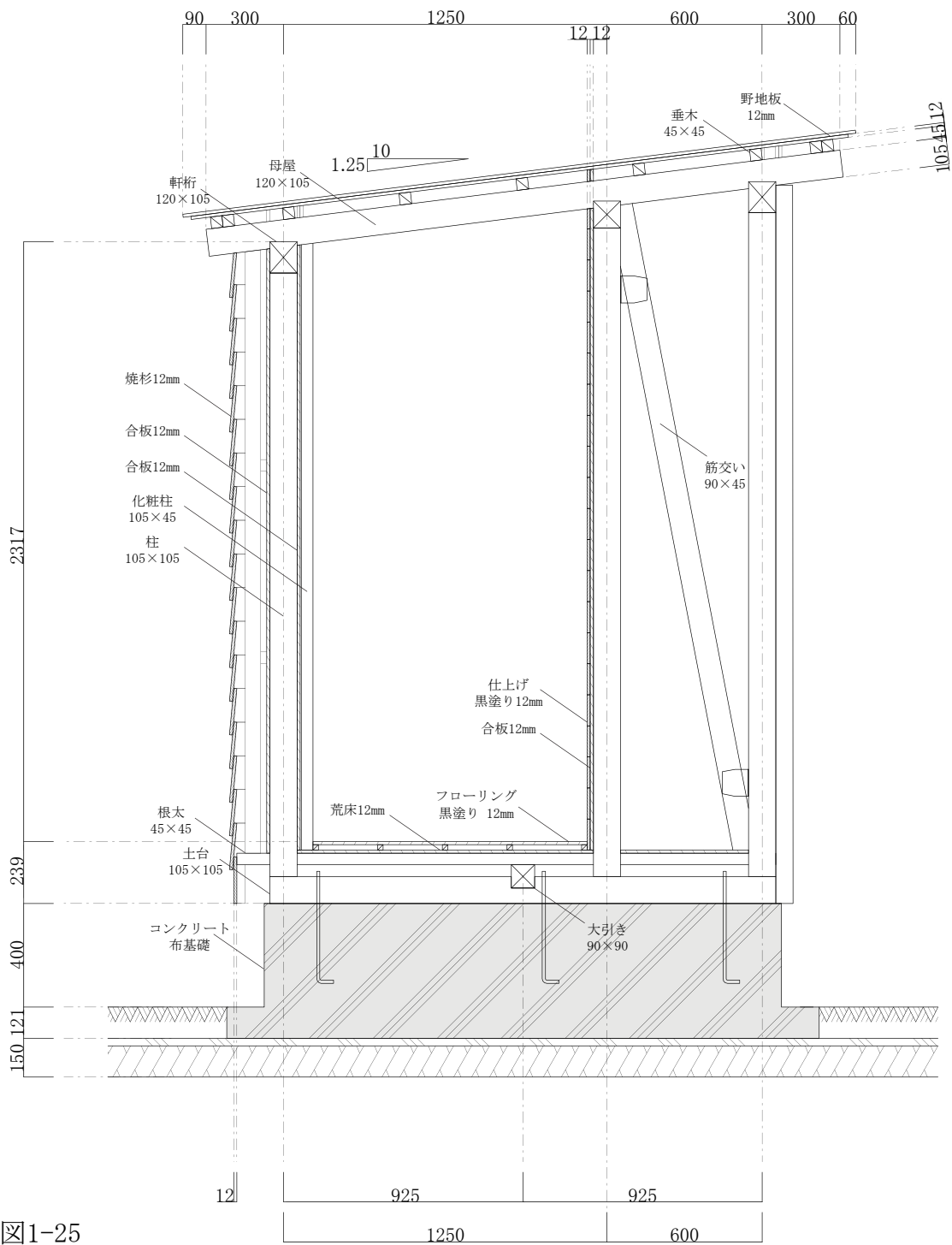
取り残された  
ブロック塀  
山側

海が近いので、風の強い日でも  
外で過ごせるように  
敷地西側にハナレを配置し  
風を受け流すように外壁をゆるく湾曲させた。  
テントはここで過ごす期間のみ取り付ける仮設。

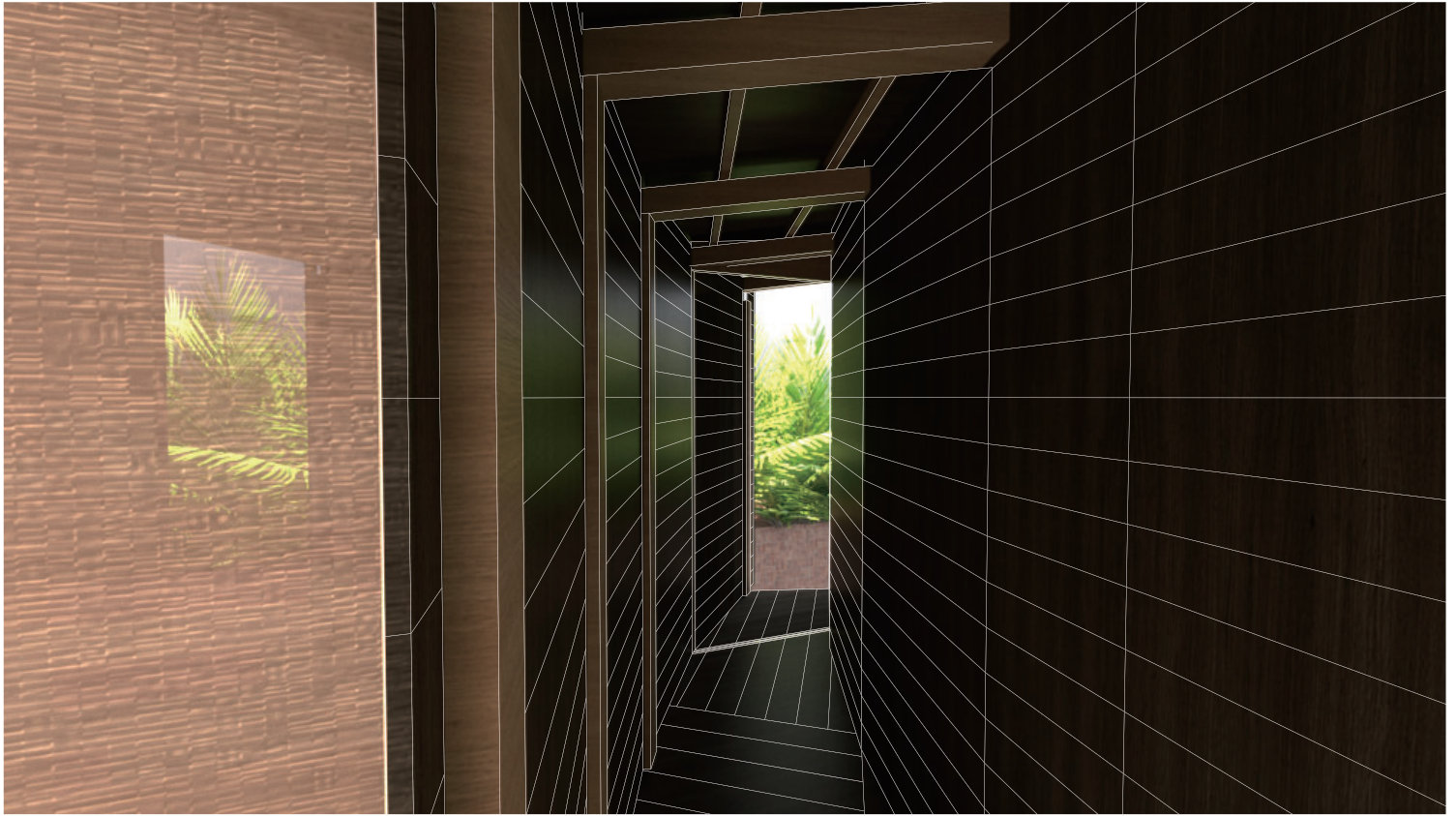
外部から赤いテント、暗幕と赤い絨毯で  
囲われた入口、黒く塗られた室内へ  
動線を辿ることで内-外の心理的距離をもてるよう  
全ての要素を空間体験の一部として構成した。



ソテツは館山周辺でよく見られる。  
 誰にも手入れされていないが  
 生命力を非常に強く感じる



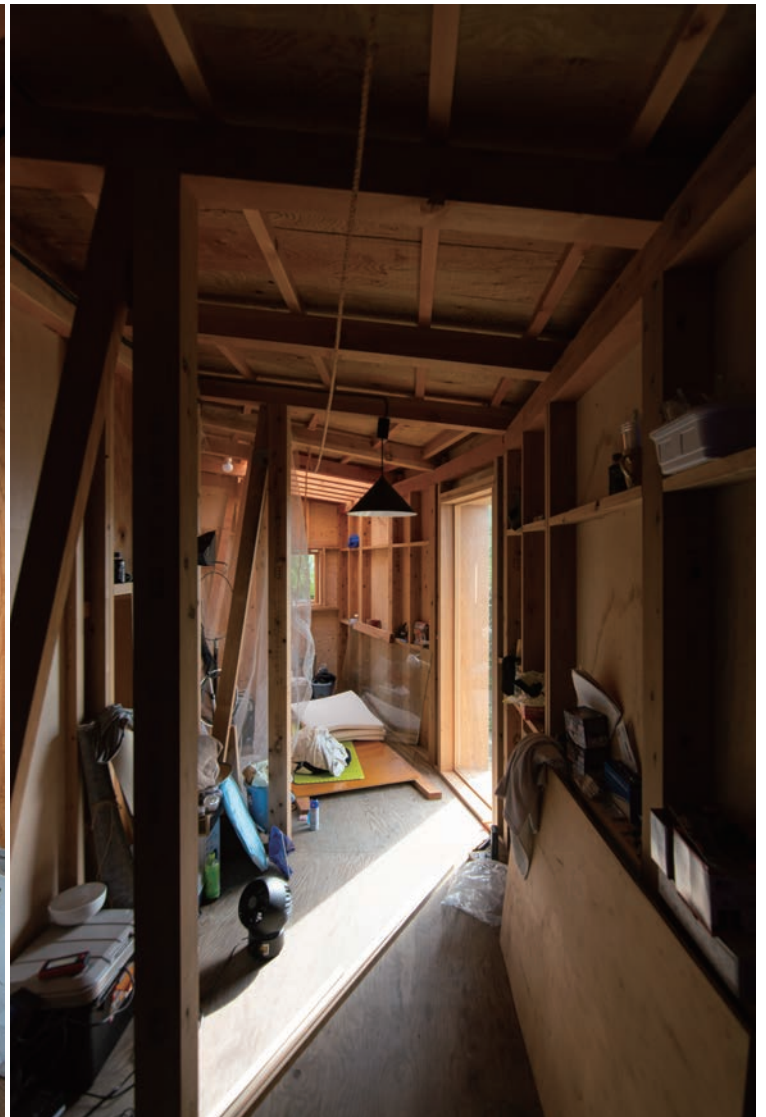
断面図1-25



内観予想パース 回廊中腹から北側を見る ソテツを狙う



施工途中 北側を見る

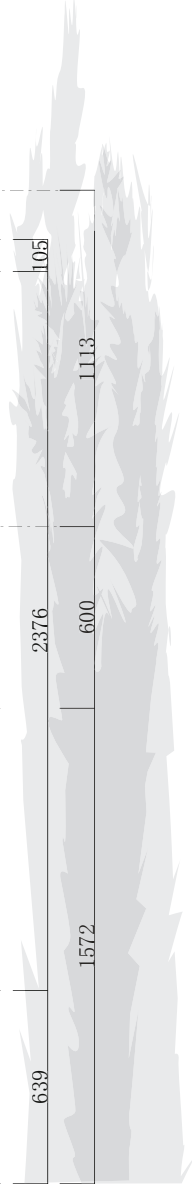
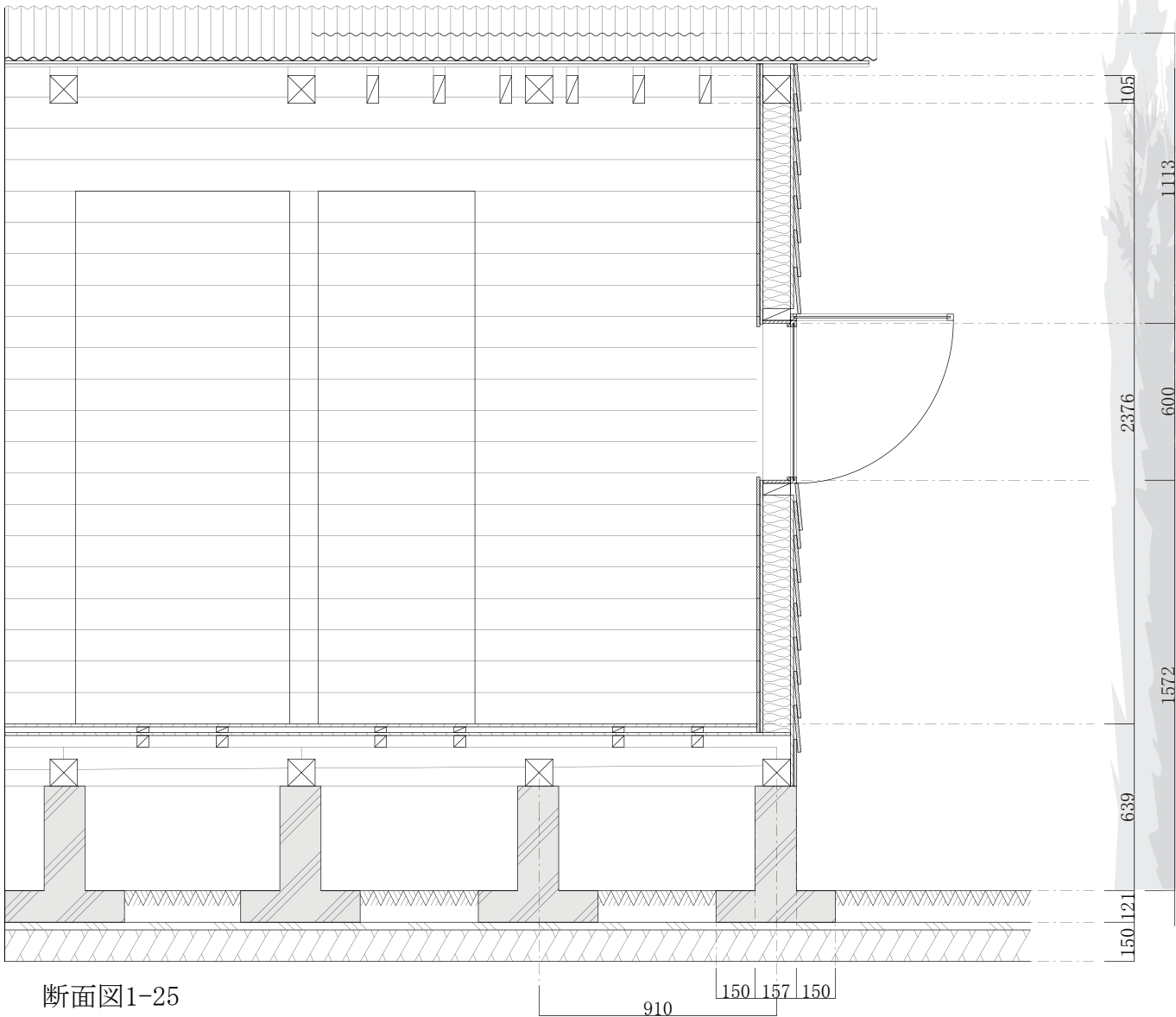


施工途中 南側を見る

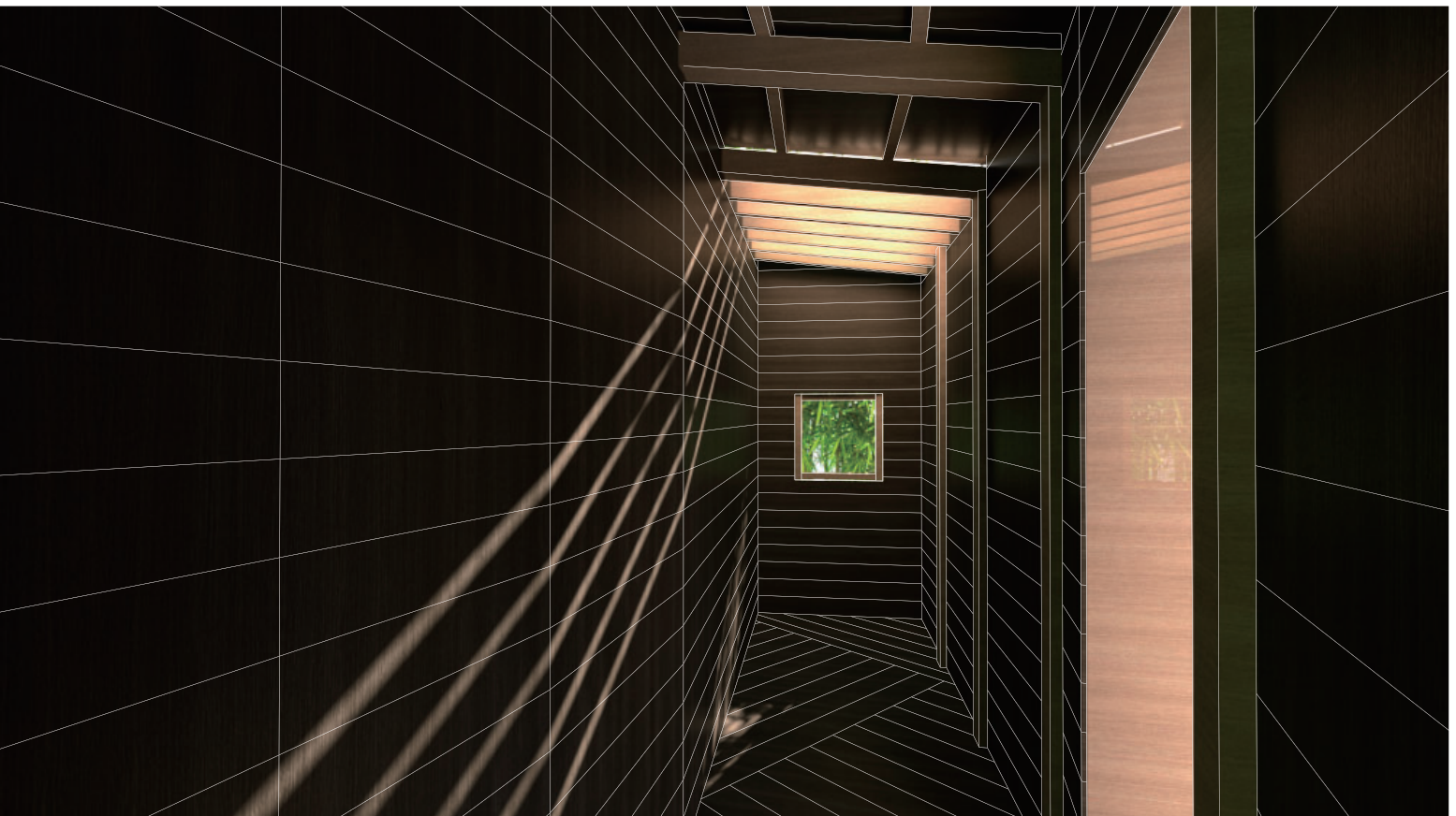


竹藪

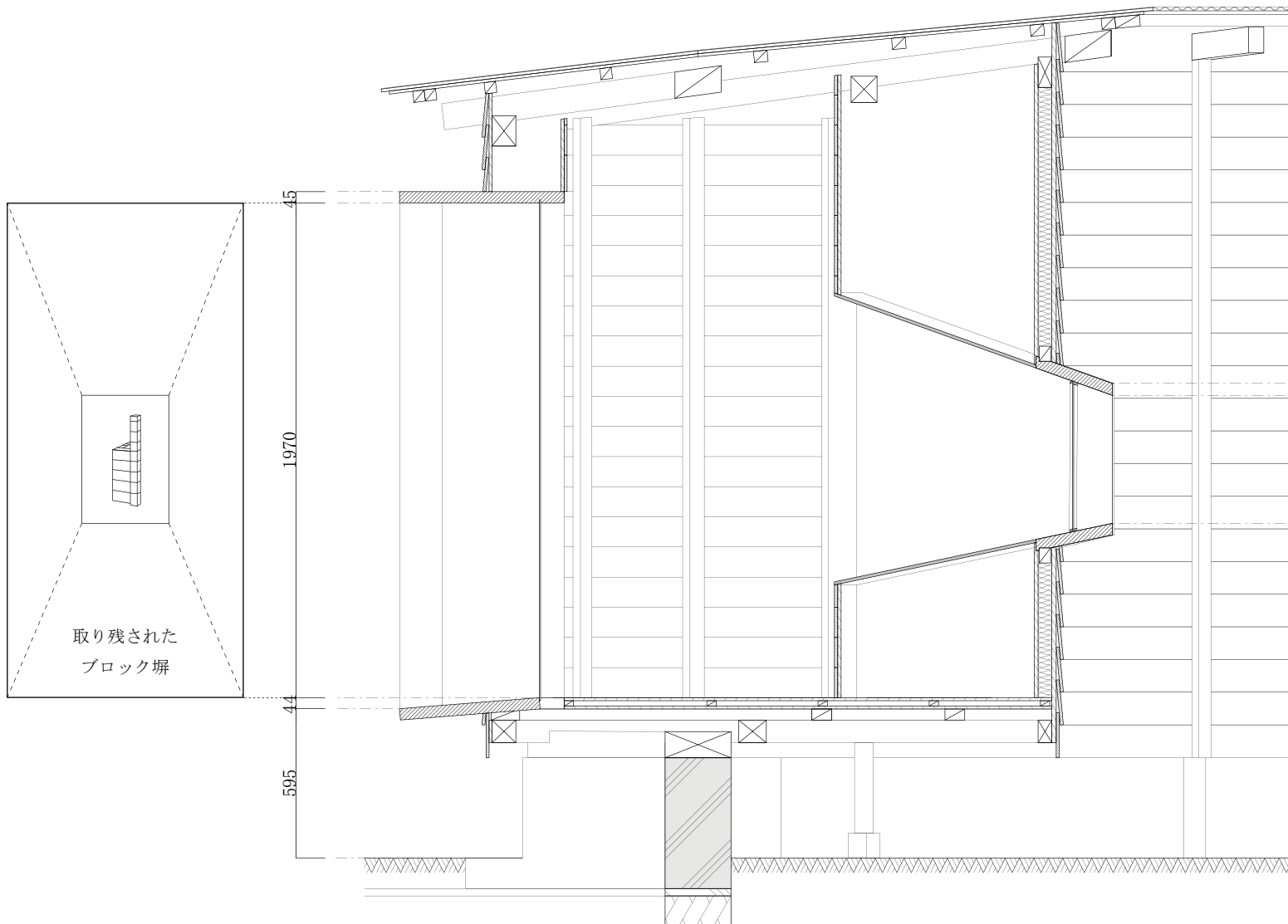
海が近く、防風の観点で昔からダンチクが植えられ、自生している。ここでは珍しくダンチクとは異なる竹藪がすまし顔で綺麗に立ち並んでいた。



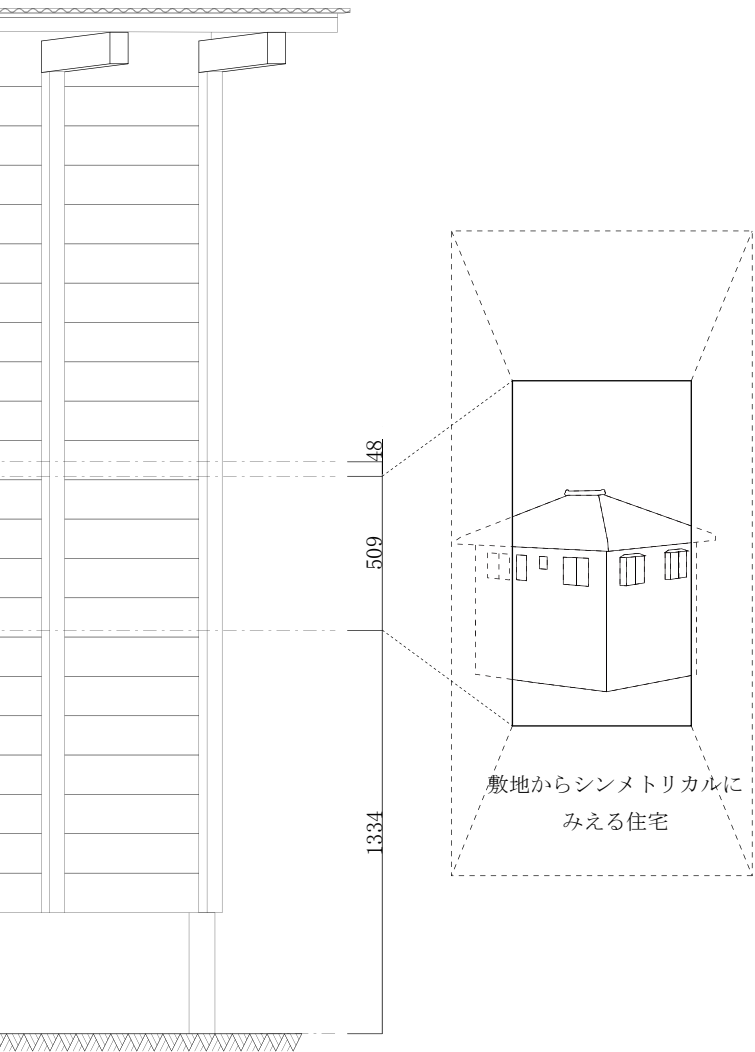
断面図1-25



内観予想パース 南側を見る  
竹藪の影が上部のルーバーから入り込む  
竹藪の動き、光、影を共有する



断面図1-25



敷地周辺では珍しい、比較的新しい住宅  
敷地からちょうど45° 角度が振られている  
雑然とした周囲から浮いて、不思議な存在感を放つ



敷地の裏にあった住宅は台風の被害を受け解体された。  
敷地南側の崖に対面するように配され、置き去りにされたブロック塀







## 「家」

予算が限られていたので様々な部分を自主施工している。  
どことなく素人らしさを感じられる、そんな風貌が嫌いではなかったが  
小屋とも建築とも言い切れない様子だった。

そんななか扉を施工する段階になり  
友人とどんな施錠方法がよいかで話し合った。  
扉に簡単な金具を取付け南京錠で施錠するか、  
あるいはレバーハンドルのついた錠前をつけるか。

後者にすれば、この建物は「家」になるのではないか  
そんなことを話し合いながら決定したが、それは  
小屋が建築たる雰囲気を獲得した瞬間であったように思う。



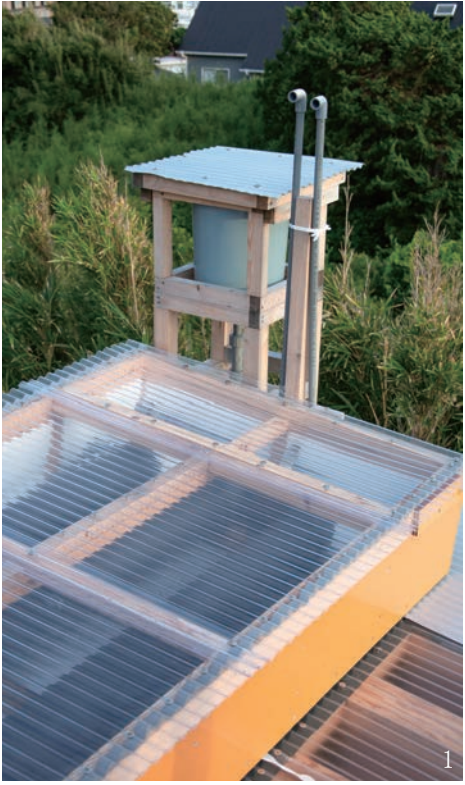
道路側からみる

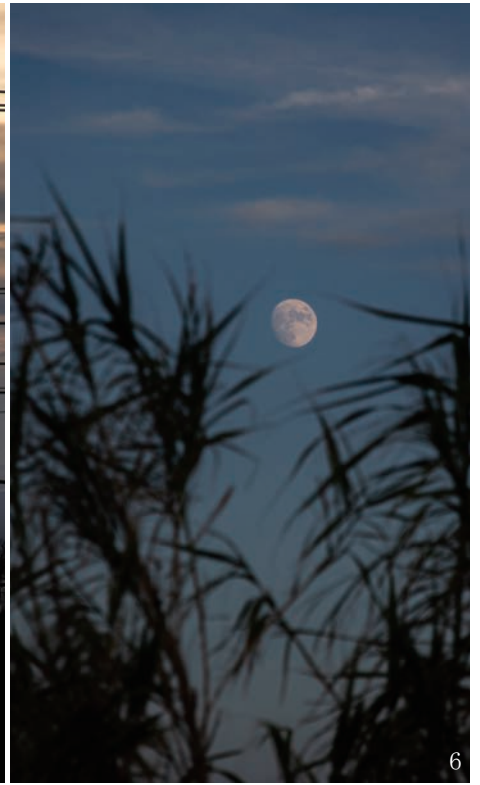


西側(海側)からみる

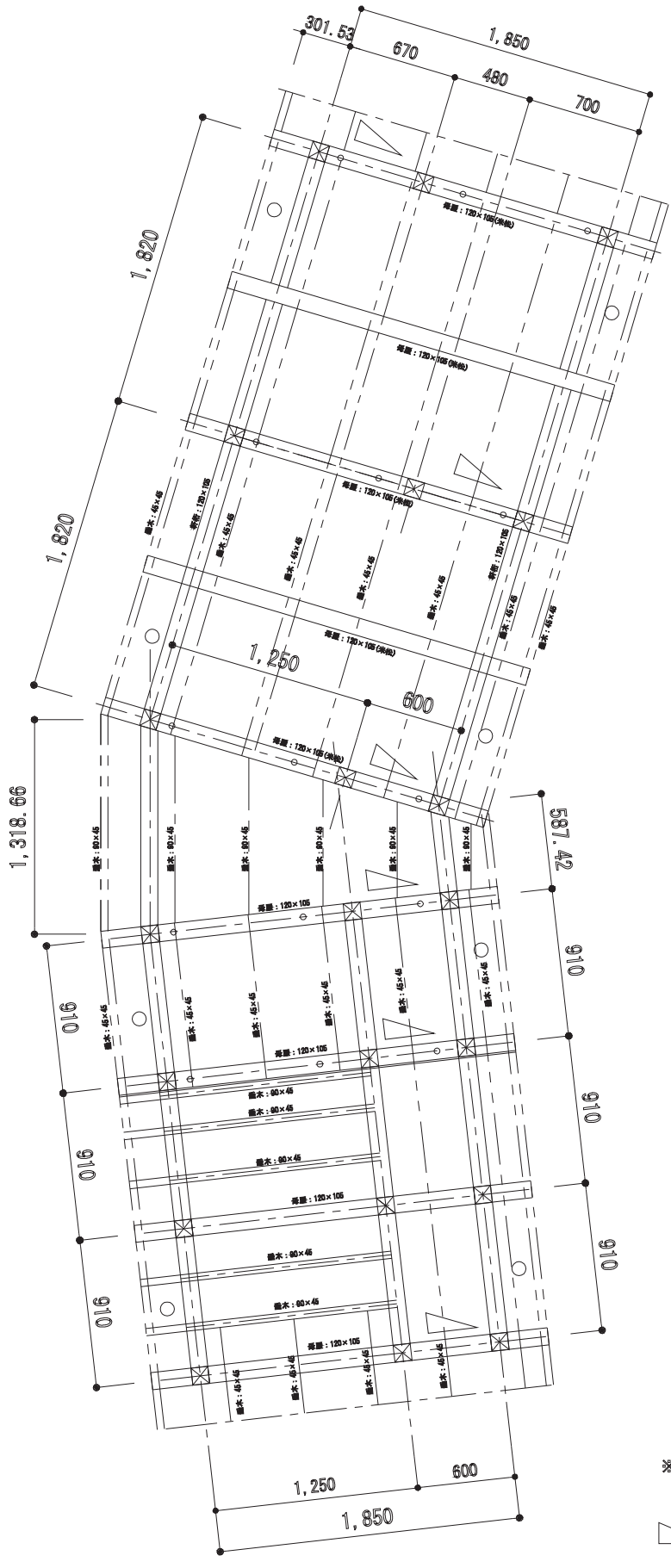


東側(山側)からみる





- 1 敷地には電気もガスも引いていないので  
太陽熱温水器を取付けシャワーの温水に使っている
- 2 ソーラーパネルをつけ、電気類の充電  
夜間の照明などに使っている
- 3 扉を開けると裏手の山が見える
- 4 夜、室内の明かりが街灯もない外を照らす
- 5 天気がいい日は富士山のシルエットが敷地からみえる
- 6 竹藪の間から
- 7 施工風景 外壁の焼杉は杉板三枚を煙突のように立て  
火が上に昇る習性を生かして全て自分たちで焼いた

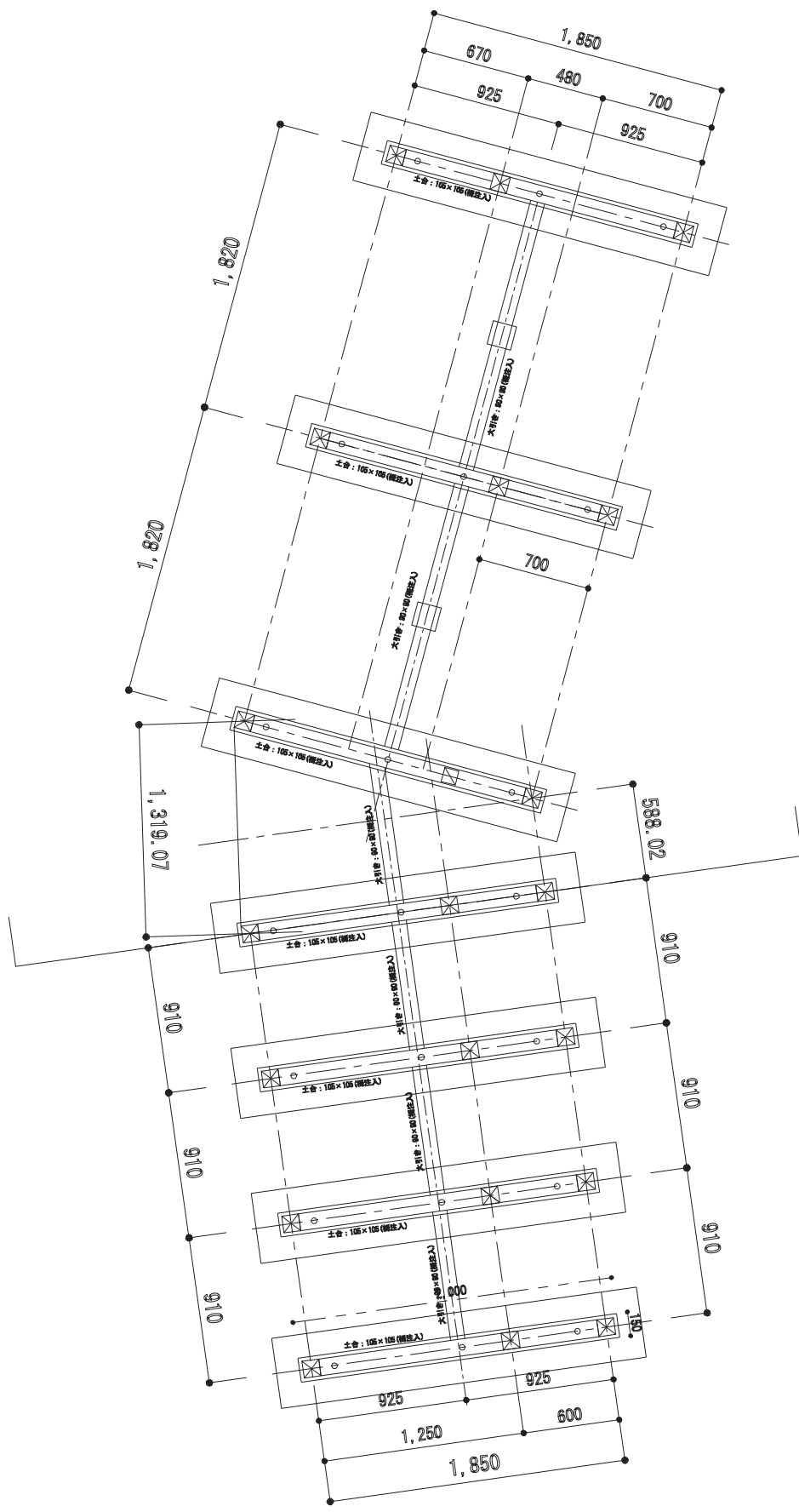


※軒先の寸法は、芯からすべて300とする。

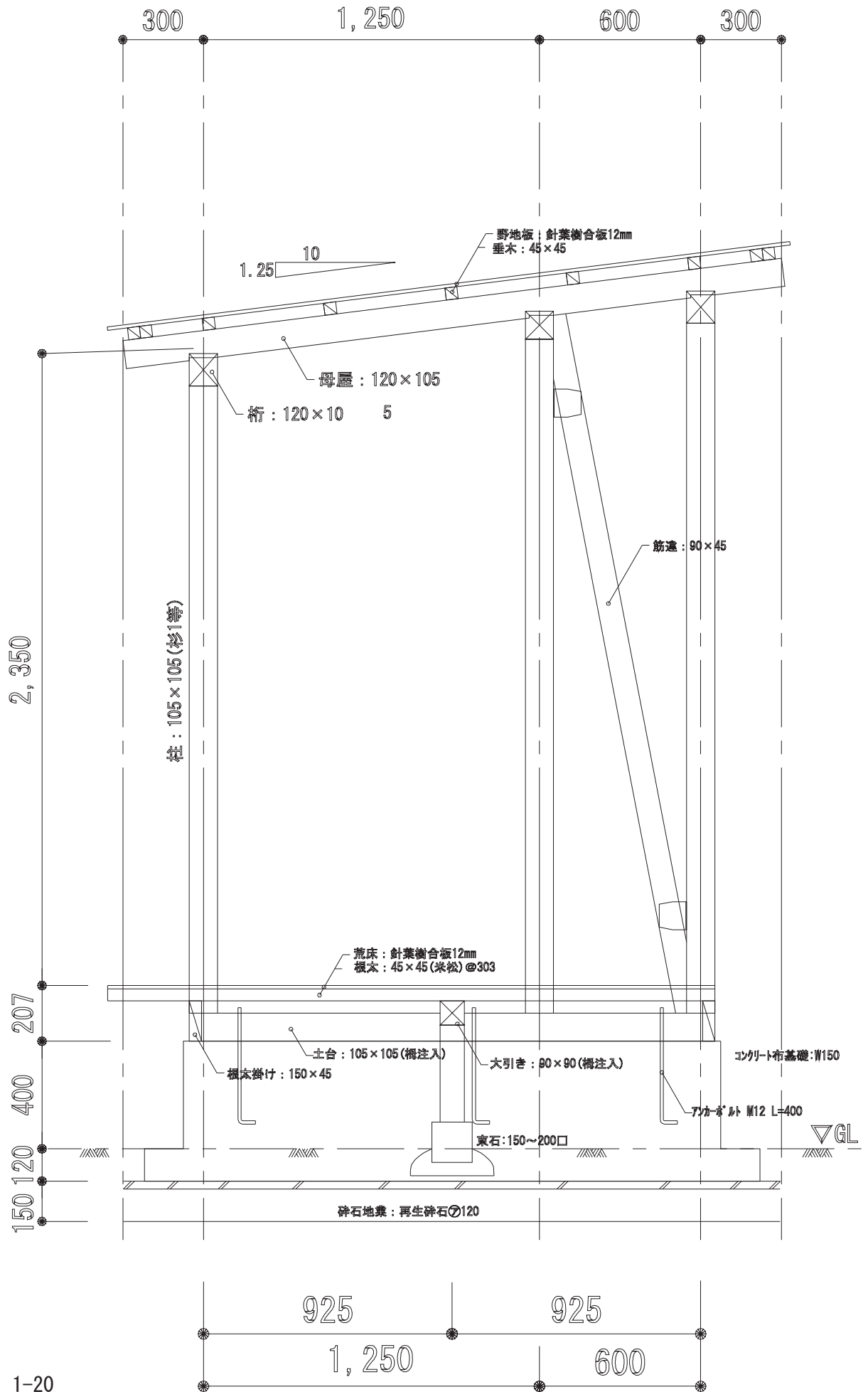
△ 筋束 : 90×45

○ 耐力壁 : 12mm×910×1820

小屋伏図 1-20

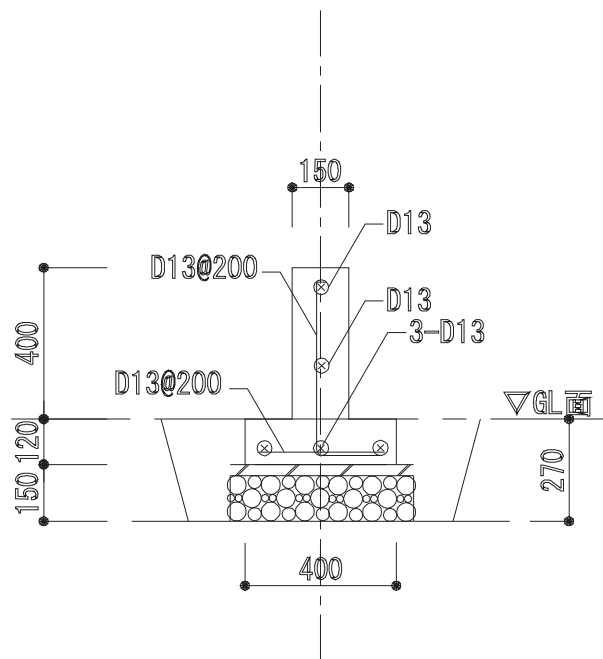


基礎伏図 1-20



断面計画図 1-20





基礎計画図 1-20



## 第5章

### 設計手法の再提案

館山のハナレでの設計手法を見直し再提案する。ハナレでは対象にした物への指向する力が非常に強い。ハナレという日常的に使われない建物においては、その力が主体にもたらす感覚に直結するめ、指向する力の強い空間が有効であると考え。しかし住宅など日常的に使われる建物では、主体が指向している対象に慣れてしまうことから、少ない数の強い指向空間を求めるよりも、数多くの弱い指向空間を設けることが有効的であると考え。

そこで強すぎる指向空間を打ち消す操作に加え、指向する対象を増やし、さらに指向空間の種類を増やすためにフレーミングと並列して他の手法も取り入れることを提案する。<sup>註40</sup>

### 5.1. サンプルング・ビジュアライジング

フレーミング以外の手法としてサンプルングとビジュアライジングを提案する。サンプルングとは物の様相を空間に直接付加することである。物の一部をそのまま取り込むことや、物そのものを型枠の一部として利用することなどが例として挙げられる。ビジュアライジングは物の様相を寸法に落とし込むことである。物の構造や秩序感を抽出し、その構成を明らかにしながら参照することなどが例として挙げられる。

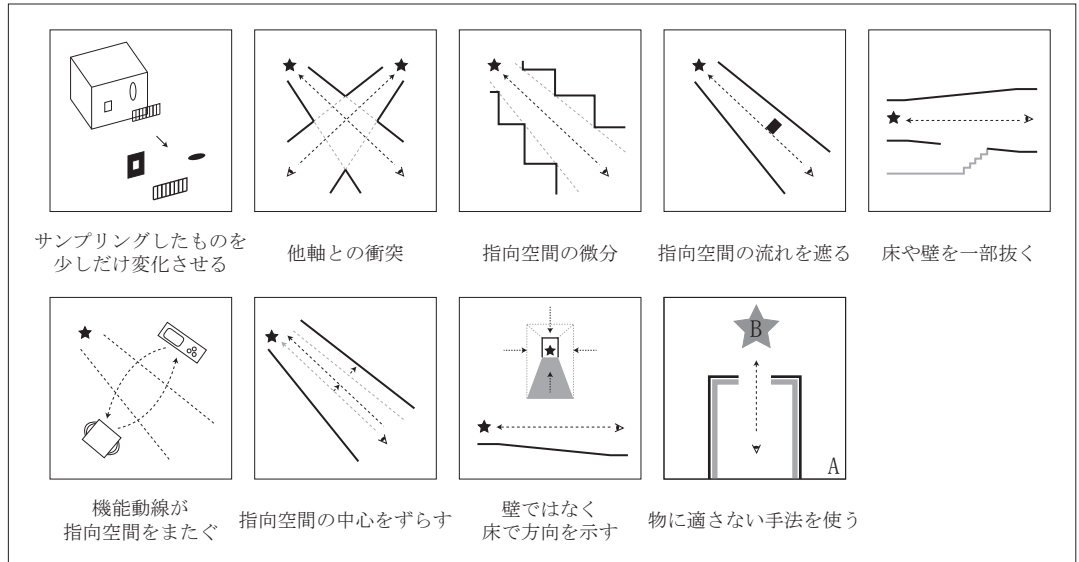
### 5.2. 指向空間の打ち消し

指向空間を取り込みながら、指向空間の軸をずらすことや、指向空間の流れを遮ることで、指向する力を弱め、空間を重層させ空間に奥行を与える。図5に打ち消しのダイアグラムをまとめた。

#### 【脚註】

40) 岡崎乾二郎は『抽象の力—近代芸術の解析』（註41）にて熊谷守一の作品に触れながらキュビズム以降の近代の視覚芸術には「抽象の力」があるとしている。抽象とは感覚によって得られた現象をいかに人が把握するかということ、主観的に感覚される現象から、より普遍的、総合的な秩序＝形式を把握する能力であるとしている。そして「抽象の力」はある対象をみたときに、その対象であることが判然としない状況から、思いがけなくその対象を認識したときのひらめき、その体験の強度をもたらすことのできる現実的な力のことであるとしている。本研究でも、指向空間を弱めることで、ある対象への指向する力（対象を認識させる力）は一見弱まるようにも思うが、判然としないある対象への認識が、生活を送る中で訪れるあるきっかけにより、主体の中で対象が現前する体験の強度は、明確に指向する対象を指示され認識するよりも、はるかに大きな強度をもつかもかもしれない。

41) 参考文献 20 p.120,124,147,157,168,175



▲ 図6 指向空間の打ち消し



## 第6章

### 本設計

館山のハナレの施主が定年後、施主の所有するハナレの目の前の敷地に東京から移住すると想定し、住宅を設計する。

施主の要望はハナレではかなわなかった海が見えるテラスとハナレの主室とは対照的な大きな主室である。

ハナレで扱った物と敷地周辺からさらに物を選定し、指向空間を構成しながら、それらの指向を同時に打ち消していくことで設計を進めた。表1に対象の一覧を示す。

エントランスから海が見えるテラスまで大きく回遊する動線で、様々にちりばめられた指向空間をまとめた。

それぞれ扱った手法と対象をアクソノメトリックを使って示す。図7



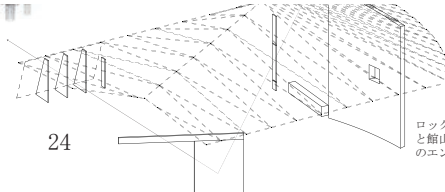
▼ 表 1 選定した物の一覧

建築物	対象物	手法	構成方法	建築物	対象物	手法	構成方法
ハナレ	ソテツ	F	B	住宅	擁壁	V,S	D
	竹藪	F	C		RC住宅	F	D
	シンメトリカルな住宅	F	B		RC住宅 構造グリット	V	D
	コンクリートブロック塀	F	A		RC住宅 開口幅	S	C
住宅	ソテツ	F,S	B		RC住宅 スラブ高さ	S	C
	竹藪	F,S	C		RC住宅 仕上げ	S	C
	シンメトリカルな住宅	F,V	B		木造住宅	F	B
	コンクリートブロック塀	F,S	A		木造住宅 構造グリット	V	B
	ハナレ	V	D		木造住宅 開口幅	V	A
	ダンテク	S	C		木造住宅 屋外手すり	S	A
	坂道(私道)	V	D		外構のレンガ風タイル	S	A
	トタン屋根	V,S	C		外構の白タイル	S	A



6. RC住宅-飯田邸のハナレの構造体：ビジュアライジング(28)  
構造体

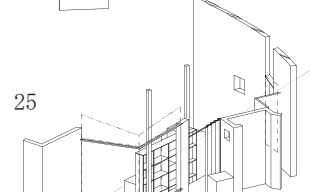
RC住宅は敷地のざりざりまで近づいてきている。クリーム色に塗装されたコンクリートの物体からは、その硬く優しいクリーム色と裏面に強い重量感を感じる。彩度の高い館山の周辺環境にあつては、その彩度の薄い外壁はさらに引き立ち、外壁に書き込まれた無数の汚れや傷がその面の物性を高めることで、重量感を獲得しているのだろうか。あるいは立面全体に対して、小さすぎる窓がそのコンクリートの圧迫感を物語っているのか。あるいは立面を縁取るように出っ張った、RCのラーメン構造の柱梁がそれを強めているのだろうか。あるいは立面のポロポジションだろうか。あるいは立面から飛び出た床スラブだろうか。ここででは中が見えないRC住宅の構造このRC住宅の構造の一部を取り出し、住宅の構造体の一部として適用する。またこの構造体は住宅の大きな平面にも断面的にも居場所を規定する。空間をゆるやかに飽する役割も持っている。



24

7. RC住宅-飯田邸のハナレの構造体：ビジュアライジング(28)  
欄の段板

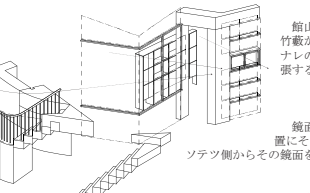
RC住宅からRCの構造体を抽出した。ここではビジュアライジングした要素をさらにビジュアライジングする。450×500mmのラーメン構造の柱を地下の欄の寸法に適用した。欄の一列もRCの柱となっているので、その対比は明確に表れる。素材の異なる物が同じ寸法で配されたときに人はその相違点を意識的になる。欄に物をおくとき、欄から物をとるとき、少し遠くから欄と構造体の柱をみるとき、そしてその構造体の柱を再び、他の地点から見出した時、RC住宅から抽出した構造体は、その輪郭を残しながら様々な部分で、新たな形と機能をもって再び立ちあがられる。



25

8. 坂道(私道)の幅：ビジュアライジング(28)  
主室の床の幅

敷地の北側には国道257号線(通称フラワーライン)から敷地へとアクセスするための坂道がある。登記簿簿本で確認したところ、どうやら今回の敷地の一部とされているようだったが、敷地の所有者である施主もこの事実を知らず、近隣住民も敷地が分割され販売された時期がバブルがはじける直前だったことから、明確には認識していないことだった。さらにこの道からアクセスする住宅が一期は4棟(一期は木造住宅-杉浦邸)もたっていたことから、敷地の所有者はいろいろな様な補修や、外構とこの私道の調整がその住民たちによって行われていた。特にこの坂道と国道の接合部は、様々な補修が複雑にパッチワークされている。国道は多くの車が通るが、この坂道をダンチクや多くの植物が縁取るために車に導く人にはほとんど見られない。そのため使われ方も非常に多用であり、この接合部は近隣住民(主に飯田住宅)が海からとってきた岩の石を干す場であり、2019年の台風15号の被害に巻き込まれるようになってしまった海場の場にもなっている。



26

木造住宅-杉浦邸の擁壁と敷地の擁壁との間にはさまれており、幅は3300-3500mmとヒューマンスケールな坂道である。ハナレの土地の整地を委託したとき、ユンボを運んできた業者の大型トラックは、この道を行き来することが非常に困難だった。

敷地の擁壁は国道との差が最大で2550mmであり、この坂道を登って行くとき敷地に生えた様々な植物を視線の高さでまじかに見ることができ、また杉浦邸の壁もたまたまコンクリートブロックのピッチと擁壁の上にある手すりがありこの坂道を登る行為にリズム感を与えている。国道は多くの車が通るが、この坂道をダンチクや多くの植物が縁取るために車に導く人にはほとんど見られない。

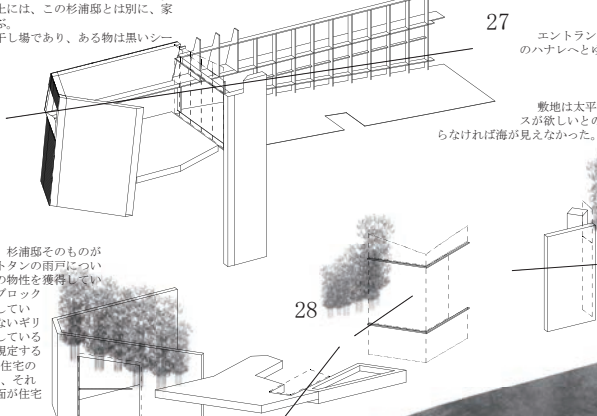
ここではこの坂道の幅を室内に反転させ、坂道に対して並置する。外部のスケールが室内に転用され、様々な部材によって居場所として咀嚼される。室内の床は1/12勾配で配される。室内の壁を昇るとき、外壁の向こう側に太平洋の水平線を見ることができ、床を登ることによって少しづつ風気が変化し、テラスへと続く欄の側板と欄板がもたらすピッチは、坂道を登るにきと得られる体験と同期している。

9. 木造住宅-杉浦邸の構造体：ビジュアライジング(28)  
構造体、455グリッド

杉浦邸は住宅の敷地と平行する台座に鎮座し、敷地に対して正面に向きあう建ち方をしている。杉浦邸が置かれる擁壁の高さは、ここでの敷地と1800mmほどの高低差がある。台座の上に建つ、黄色い木造の住宅である。その台座の上には、この杉浦邸とは別に、家からさまざまな拡張、補修され、あふれ出た物が立ちあがり、ある物はポリカーボネートの段板で拡張された高層物干し場であり、ある物は黒いシートの上に置かれたコンクリートブロックと周辺からもってこられたであろう大量の石であり、ある物はそのコンクリートブロックの上に置かれた既製品の物干し竿であり、ある物はいくつもの手すりを繋ぎ合わせてできる擁壁の輪郭線であり、ある物はどこからか拾ってきた風呂桶であり、ある物は杉浦邸の屋根から伸びるアンテナであり、ある物は余ったコンクリートとタイルでつくられた小さな台座であり、ある物はコンクリートブロックと平行に並べられた木製の埋材であり、ある物はラタン合板でできた小さなテーブルであり、ある物はモルタル、白タイル、レンガ風タイルなど様々な異なる部材が貼り付けられた擁壁そのものであり、ある物は台座の上の設置されたさらなる台座に鎮座するソテツなどであり、ある物は...ある物は...

これらの物が建築や周辺の環境に負けじと自立するのは、杉浦邸そのものが下地として機能する立面をもっているからである。杉浦邸のトランの戸について、その物をモノとして抽象される一歩手前でその物性を獲得している。逆に杉浦邸の土台である擁壁は、そのコンクリートブロックのものがモノとして抽象する一歩としてのリズム感を出している。これらの要素はある特定の意味に回収されることがないギリギリのところまでその身を翻し、常にその物の様相を提示しているように思う。それら杉浦邸の立面要素が作り出す要素を規定する木造の構造体を住宅から取り出し、その910のグリッドを住宅の上に重ねる。抽出したグリッドの交点から97本の柱が生え、それは杉浦邸がもつ物の様相の一部を示し、また杉浦邸の立面が住宅の内部で現前するきつかりを導くかもしれない。

この木造の構造体は主に、主室の床を支え、また天井へと続くことで、屋根を引っ張る。



28

ハナレの北東にはもともと別荘があつた。2019年の台風15号によって屋根が一部損壊し、その部位を補修するなら、ほとんど使われていなかった別荘をこのタイミングで手放すことに決められた。その際に残った残されたのがこのコンクリートのブロック場だ。その際は欄の先にある崖から這い出ている小動物や虫、また植物をせまめるように立っている。おそらく解体を要請したこの住人もこの壁だけは意図的に残したのだろう。それはこの館山の自然への抵抗の印でもあり、また人工物が自然の一部へと回収される様相を示しているものもある。塗装がはがれ、コンクリートブロックがあらわになり、また異なる色が塗装され、そして自然がそれを崩していく。人間と館山の自然とがつくりだした遺物だ。館山のハナレでも対象にしたこの住宅のエントランス脇の壁として引用する。エントランス脇にこの壁には日常で使われる様々なものが置かれる。

21. ソテツ：サンプリング(23)  
日当たりの悪い外構内に位置する植栽  
館山ではよくソテツを目にする。そのソテツはほとんどの場合、誰かによって植えられたものである。立派なコンクリートの台座の上に設置されたものも少なくない。そして大抵の場合そのソテツは異常な生命力でその台座を壊しにかかる。またその動きに合わせて人間もその台座を補修する。つまりソテツは人間がもたらす館山の自然の脅威ともいえる。昔から非常に強い生命力とその出で立ちからソテツを植える家は金持ちだと言われているが、そのソテツがもたらす人間がコントロールできないようなものでは決してない。そして館山のハナレの目的にも例外なきソテツが台座に設置されており、そのソテツは行く手を阻み、住宅そのものが解体されたあとも、ひりひりに増殖し続ける。このソテツを日当たりの悪い外構内に挿入する。ソテツが日差しを求めて外構から首をだし、トランへと近づき室内からその湾曲した物を見ることができるとは思えない。

22. ダンチク：サンプリング(23)  
日当たりの悪い外構内、テラス側、どこにも生えてしまう植栽  
ダンチクはもともと海風からの防風林として植えられたものだった。しかし今では館山のあちこちに生えている。竹藪の形は似ているものの、生命力が強く、生え方もまっすぐではなく、様々な入り乱れるため作用している。大きくなりすぎたダンチクはあまり見えないように、なかにかその藪のなかに潜んでいるような雰囲気がある。そのダンチクはきつかりこの住宅の隅々に生えていくだろう。あえて生えることのできる場所を用意することで自然に生えてしまったダンチクの差を意識させる。

23. 竹藪：サンプリング(23)  
ハナレ側エントランス南側植栽、現在外部植栽、調整される植栽  
館山のハナレでも対象にした竹藪である。イネ科の植物が大量に生息している館山で竹藪が鎮座している場所は珍しい。ダンチクに近い形をもつこの竹藪は館山のハナレの南側にハナレと隣地と隔てるように並んでたっていた。この竹藪を並びを拡張するように地面を引き伸ばし住宅の敷地内にも竹藪を植える。この竹藪はハナレと住宅の二つの曲面の間を歩くとときに奥へとつづく消失点にあたる。

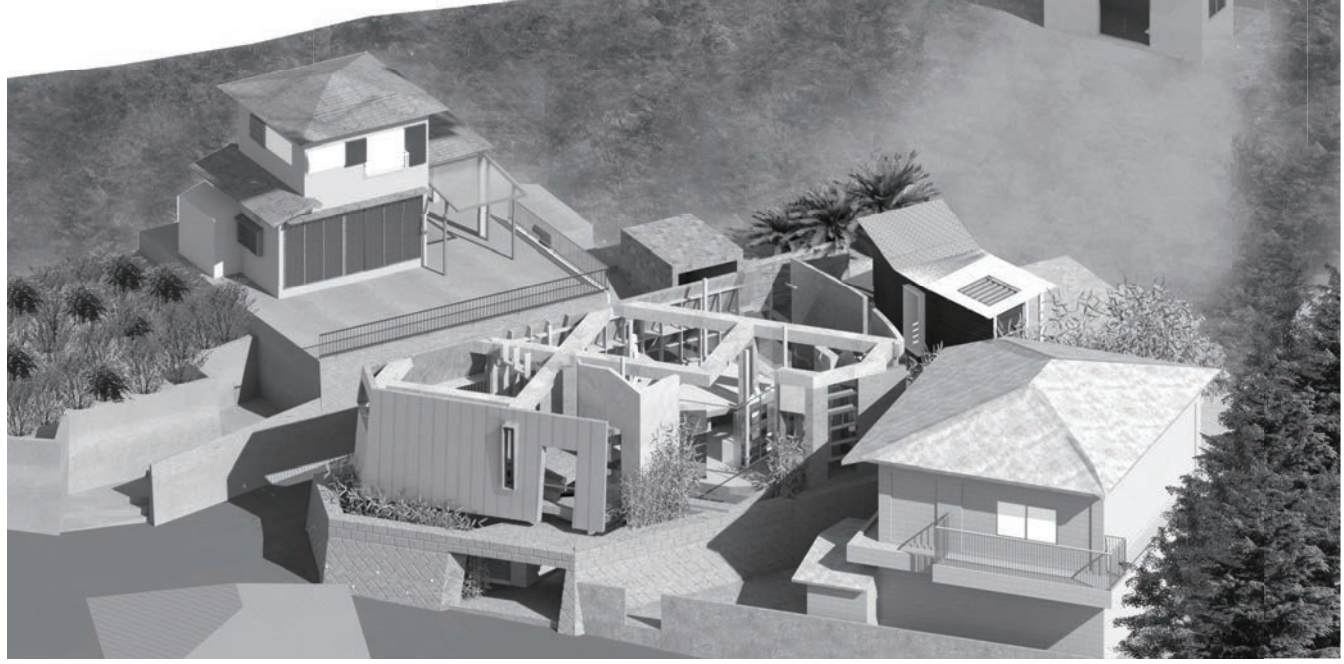
24. ソテツ、木造住宅へ：フレーミング(5, 6, 8, 11, 13, 18, 21, 22, 24)  
鏡面を設けることで住宅内にソテツを映し出す。鏡面は取柄の扉として動き、ある位置にその鏡面があるとき、木造住宅-杉浦邸からソテツへ鏡が反しながつたが。

25. シンメトリカルな住宅、コンクリートブロック：フレーミング(3, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 13, 18)  
館山のハナレから引き継いだ対象物へのフレームをここでも適用する。しかし、館山のハナレでは強烈な瞬間的フレームであるのに対してここでは、複数の材が重なる時にゆるい見えるフレームであり、日常の様々なタイミングで視覚誘導が行われるように材を配置した。

26. RC住宅：フレーミング(2, 7, 8, 9, 16, 18, 21, 22)  
エントランスから入り、主室へ向かう階段は杉浦邸に対して水平に始まり、RC住宅-飯田邸のハナレへとゆるく湾曲しながら進んでいく。斜めの床をぐくり、階段のぼりながらハナレの住宅が立ち現れる。

27. 太平洋、富士山へ：フレーミング(2, 5, 7, 8, 12, 21, 22)  
敷地は太平洋に近く、徒歩5分ほど海にはいる。館山のハナレには海の見えるテラスが欲しいとこのことだったが、予算もなく、ハナレの敷地から見るとはかなり富士山の屋根に登らなければ海が見えなかった。住宅では主室からファサードを通して太平洋と向かいに見える富士山を射貫く。

28. ダンチク、竹藪：フレーミング(3, 15, 16, 17, 22, 24)  
住宅のさまざまなサンプリングしてきた植栽をフレーミングする。駐車場の上部に配された植物たちは朝日を受け、地下へと影を落とす。駐車場をその影で満たす。また時間が変わると窓枠へとその影は伸びてゆく。また寝室の目の前の竹藪は寝室の窓枠(仕上げをせりだし、サッシ枠は見えない)によって切り取られ、さらにガルバニウムのトランファサードにその色味と動きを出す。ハナレ側エントランス付近に配された竹藪は浴室やトイレから見える。



▲図7 アクソノメトリック

以下、図7 アクソメ文章を拡大して載せる。

## 1. 木造住宅 - 杉浦邸の開口幅：ビジュアルライジング (23)

アルミサッシ 638mm

杉浦邸に杉浦さんは月に数回しか訪れない。数年前に他界した姉の持ち家だったが、今は杉浦さんが譲り受け、管理している。少し高台にあることから海からの風の煽りが強く、2019年の台風15号の被害による損傷を、地道に一人で直している。もともとタイルを扱う、左官職人だった杉浦さんは、ホームセンターで手に入る部材ですべて自分で補修している。そして杉浦さんが、たまの休日に訪れるこの杉浦邸は、月に数回だけ風が通り、中の様子をうかがい知ることができる。南面、一階部分のファサードを均等に7分割した開口は、普段は閉ざされているがここぞとばかりにすべて外される

高台にあるから海への眺めがいいのだろう、閉ざされていた錆びた上階の雨戸もいくつか開き、中からテレビの音や、クラシックの音楽が漏れて聞こえてくる。太平洋が見える西側の窓は杉浦さんがいるときは常に全開だ。青い雨戸は錆つき、さらに補修されながら、淡い黄色い外壁塗装とのコントラストが美しい。そんな雨戸、開口はこの杉浦邸での杉浦さんの活動と、この杉浦邸の歴史を直接的に表している。この開口幅を新しい住宅に反復して使う。主室に沿って配される連窓の引き違い戸の窓の大きさを638mmにした。また主室からテラスへと続く開口の幅もこの幅を採用している。そして主室の斜めの床を歩きながら、開口越しに見える杉浦邸は開口幅に分断されながら同じ幅をもつ開口のついた住宅としてその存在を喚起するかもしれない。

## 2. トタン - ガルバリウム鋼板の波板 / ポリカーボネートの波板：サンプリング (25)

RC 打ち放しのファサード

館山で一番よくみられる部材だ。どの住宅にも部分的に使われている。みな館山の自然によって犯された部分を自分の手で補修している。あるいはちょっとした洗濯物干し場だとか、サンルームなど住宅から拡張する機能をつくる部材として多用しているようだ。ホームセンターにいけば波板の豊富な種類と、それをとめる金具類、また波板に合わせてできたスポンジなど様々な波板グッズがすぐに揃う。波板は扱いやすく、波の寸法が同じ規格のものを選べば、2, 3山分の波を重ねることで、つぎ足すことも可能だ。波板の山に穴をあけ、波板用の釘を打てばすぐに留められる。大きさも手頃で、一人で持ち運ぶことも可能だ。

2019年の台風15号の被害による損傷から、この波板はなかなか補修に来てくれない業者のかわりに自分で補修するときの材料として多くの住宅で使用されたようだ。昔ながらの大きな瓦葺き屋根の住宅は瓦をやめ、トタンの波板で補修していることも少なくない。屋根は軽くなり、補修のしやすさと、周りへの被害を考えトタンにする人が多いそうだ。そういった住宅をみると屋根面が大きい分、

非常にマッシブで圧迫感のあるボリュームにみえるはずが、波板の軽さがもつ雰囲気をついてことなく浮き立つような印象をうける。それは波板がもつ意味的な作用からかもしれないし、波の山と谷がもつ凹凸による陰影が、面を線として消化させているのかもしれない。そんな波板をここでは RC の型枠として使い、ファサードの一部を担わせることで、土地の風土を取り込む立面をつくる

### 3. トタン - ガルバリウム鋼板の波板：サンプリング (23)

ファサードの仕上げ材、引き違い窓の横滑り雨戸

館山の様々なところでアドホックに使われているガルバリウムのトタン波板。

ガルバリウムは光を鈍く反射しながらも、その波の凹凸が、光を拡散し、一定のリズムで面に陰影をつける。海風によって、このキラキラした面材は少しずつ風景に馴染み、そして錆びはじめ、穴が開き、そしてまた新しい波板が付け足され、補修されることで、自然のもつ強大な力とそれに対抗する人間の生命維持活動とのアンサンブルができあがる。

この部材は自然と人間の活動をつなぐ媒介物として、その建築の歴史を表し、また人間の活動を被覆する構築物として、自然の力強さや美しさを映し出す鏡として退隠する。強烈な植物の生命力がこれを青く染め、太平洋に沈む太陽がこれにその軌跡を描き、天空を覆う空気の青さがこれを透明にするのである。

この部材を建築を取り巻く RC の外壁に取り付ける。また杉浦邸の開口幅をサンプリングした引き違い窓の雨戸としてこれを設置した。この横滑り出し形式の雨戸は接道する私道を通る近隣の人の視線を遮りながら、ぼんやりとした光を室内にもたらす。

### 4. RC 住宅 - 飯田邸のハナレ (空き家) の開口幅：ビジュアライジング (28)

テラスの開口 スリット

住宅の敷地の南側敷地境界ぎりぎりに建つ (一部超えている気がする ...) この RC 住宅は、シンメトリカルな住宅の家主、飯田さんのハナレだ。もともとは飯田さんの兄弟が住まわれていたが、兄弟が東京へ移住したことにより、今は飯田さんが管理している。たまに飯田家の息子さんがここを使っている気配が感じられはするものの、今はほぼ空き家と化しているようだ。

この住宅の外壁はクリーム色を基調としているが、その上に様々な色のよごれがついている。海からの強い風や、雨、そりたつ植物、また小動物の活動がこの汚れをつくっているように思う。

そののぺったした外壁に小さな開口が三つだけついている。この住宅での活動はほとんど伺い知ることができないが、この小さな三つの窓に置かれた物の影や色味だけはわかり、その窓がどんな場所にあって、どんな機能をもっているのかを想像することができる。迫りくる RC 住宅の、素知らぬ顔から漏れ出た微かな表情。それをつたえる象徴的な窓の開口幅を取り出し、RC のファサードにスリッ

トとして導入した。

また RC のファサードを、開口の形で立ち上げながら、RC 住宅の開口がもつその意味合いを表象している。スリットは RC の柱が落ちる目の前にあたり、内側から外をみる孔としても機能せず、外から内側を覗き見る孔としても機能しない。その形だけがそこに現前する、RC 住宅の開口が持つその意味が反芻される。

## 5. 館山のハナレの外壁曲面：ビジュアライジング (28)

### RC 打ち放しファサード

館山での設計活動をはじめのきっかけとなった館山のハナレ。施主さんは大学同期の両親である。長年の間、放置された土地に週末の間だけ遊びにくる小住宅を立ててほしいとの依頼だった。敷地から太平洋まで歩いて 2,3 分で、裏にも散策できる整備された山があり、アクティブな施主夫婦は遊ぶことに事欠かないそうだ。

太平洋からの強い海風を受け流すようにこのハナレの外壁は曲げられている。実際には外壁を 8 分割し、館山で手に入る杉板 (天竜焼杉 (杉板を三角形に組み煙突効果を利用して、焼杉を焼き上げる伝統的な方法を利用した (館山は杉やヒノキが名産)) を貼り付け、その焼杉の表面のムラを用いてなるたけ曲面を出せように施工した。

館山のハナレは細長い建築であり、それはこの建築が指向空間から直接立ち現れたものであることを示している。純粋な空間を生成することを最初目指していたからだ。しかし外壁がすべて仕上げられ、内装を施工する段階になったいま、今一度この立面をみたときに感じることもある。ぼくらはここで電気なし、トイレなし、風呂なし、テント / 車中泊での状態で、設計と施工をはじめ、言うまでもなく館山の強烈な自然の洗礼にあった。一年間の施工期間で館山での強烈な自然とそれをねじ伏せる人間との駆け引きを目撃していた。

自然も力が強い場所では、人間もそれだけ自然に対して強くなるようだ。館山ではソテツをよく見かけるが、そのほとんどは誰かが植えたものである。もともとそこにあった自然を根こそぎ削り取り、台座を設え、その上にソテツを飾る。そして館山の温暖な気候から養分をたっぷり受けとったソテツはいつしかその土台を壊し、人はまたその台座を拡張して作り直し、また壊され、つくりなおし、こわされ ..... 人間がつくっているのか自然がつくっているのか、わからないような状態だ

一年間の施工期間でそういった人と自然との苛烈なやりとりを様々な部分で目にした。東京からきた余所者のぼくらはその行為を悪趣味にも感じたが、恐らく館山に住み館山で生活をしていれば否応なく、強い自然に対抗する力のようなものを身に着けるのであろう。それは良い悪いではなく、単に館山はそういう場所であるということだ。

そういった環境に、週末だけ遊びに来るような、東京の家のハナレをつくることになった。この小

さな建築を小高い擁壁の上に置いただけでは、自然にも人間の営みにも負けてしまうと感じていた。どこかに吹き飛んで木端微塵にされてしまうのではないかと、不安を感じていた。

そこでできるだけ、その出で立ちを強く見せること、しかしすべてを受け止めるのではなく、受け流すことを考えた。400mmの台座を設えその上に湾曲した壁を設えた。自然をかわしていく。正面から、自然に対抗しない。だけど外壁は黒光りする焼杉を使う、見栄っ張りだろうか。いや、おそらく普通の外壁であっては完全に負けてしまっていただろう。自然の力は受け流したいけど、この台地に立ちたい、そういった判断で外壁を湾曲させていたように思う。

ここではその外壁の湾曲を8等分する前のものに戻し、その曲率を用いたRCの壁柱をつくることにした。ハナレの湾曲した焼杉の外壁面とRCの湾曲した外壁には含まれた、通路は強烈な奥性をつくりだす。奥にあるのは竹藪であり、これもまたハナレで対象にした物のひとつである。

#### 6.RC住宅-飯田邸のハナレの構造体：ビジュアルライジング(28)

##### 構造体

RC住宅は敷地のぎりぎりまで近づいてきている。クリーム色に塗装され被覆されたコンクリートの物体からは、その薄く優しいクリーム色とは裏腹に強い重量感を感じる。彩度の高い館山の周辺環境にあっては、その彩度の薄い外壁はさらに引き立ち、外壁に書き込まれた無数の汚れや傷がその面の物性を高めることで、重量感を獲得しているのだろうか。あるいは立面全体に対して、小さすぎる窓がそのコンクリートの圧迫感を物語っているのか。あるいは立面を縁取るように出っ張った、RCのラーメン構造の柱梁がそれを強めているのだろうか。あるいは立面のポロポジションだろうか、あるいは立面から飛び出た床スラブからだろうか。ここでは中の見えないRC住宅の構造このRC住宅の構造体を一部取り出し、住宅の構造体の一部として適用する。またこの構造体は住宅の大きな主室に平面的にも断面的にも居場所を規定する。空間をゆるく分節する役割ももっている。

#### 7.RC住宅-飯田邸のハナレの構造体：ビジュアルライジング(28)

##### 棚の段板

RC住宅からRCの構造体を抽出した。ここではビジュアルライジングした要素をさらにビジュアルライジングする。

450×500mmのラーメン構造の柱を地下の棚の寸法に適用した。棚の一行もRCの柱となっているので、その対比は明確に表れる。素材の異なる物が同じ寸法で配されたときに人はその相違点に意識的になる。棚に物をおくとき、棚から物をとるとき、少し遠くから棚と構造体の柱をみたとき、そしてその構造体の柱を再び、他の地点から見出した時、RC住宅から抽出した構造体は、その輪郭を残しながら様々な部分で、新たな形と機能をもって再びたちあらわれる。

## 8. 坂道 (私道) の幅 : ビジュアルライジング (28)

### 主室の床の幅

敷地の北側には国道 257 号線 (通称フラワーライン) から敷地へとアクセスするための坂道がある。登記簿謄本で確認したところ、どうやら今回の敷地の一部とされているようだったが、敷地の所有者である施主もこの事実は知らず、近隣住民も敷地が分割され販売された時期がバブルがはじける直前だったことから、明確には記憶してないとのことだった。さらにこの道からアクセスする住宅が一時は 4 棟 (一棟は木造住宅 - 杉浦邸) もたっていたことから、敷地の所有者はいないものの様々な補修や、外構とこの私道との調整がその住民たちによって行われていた。特にこの坂道と国道との接合部は、様々な補修が複雑にパッチワークされている。

国道は多くの車が通るが、この坂道をダンチクや多くの植物が縁取るために車でくる人にはほとんど見られることはない。そのため使われ方も非常に多用であり、ここの接合部は近隣住民 (主に飯田さん) が海からとってきた岩のりを干す場であり、2019 年の台風 15 号の被害以降大量にとれるようになってしまった天草の干場にもされている。

木造住宅 - 杉浦邸の擁壁と敷地の擁壁との間にはさまれており、幅は 3300~3500mm とヒューマンスケールな坂道である。ハナレの土地の整地を委託したとき、コンボを運んできた業者の大型トラックは、ここの道を行き来することが非常に困難だった。

敷地の擁壁は国道との差が最大で 2550mm であり、この坂を登って行くと敷地に生えた様々な植物を目線の高さでまじかに見ることができる。また杉浦邸の擁壁がもたらすコンクリートブロックのピッチと擁壁の上にある手すりがこの坂道を登る行為にリズム感を与えている。

国道は多くの車が通るが、この坂道をダンチクや多くの植物が縁取るために車で通る人にはほとんど見られることはない。

ここではこの坂道の幅を室内に反転させ、坂道に対して並置する。外部のスケールが室内に転用され、様々な部材によって居場所として咀嚼される。この坂は 1/10 勾配であるのに対して、室内の床は 1/12 勾配で配される。室内の坂を昇るとき、外壁の向こう側に太平洋の水平線を見ることが出来る。床を登ることで少しずつ風景が変化し、テラスへと続く棚の側板と棚板とがもたらすピッチは、坂道を登るときに得られる体験と同期している。

## 9. 木造住宅 - 杉浦邸の構造体 : ビジュアルライジング (28)

### 構造体、455 グリット

杉浦邸は住宅の敷地と平行する台座に鎮座し、敷地に対して正面に向きあう建ち方をしている。杉浦邸が置かれている擁壁の高さは、ここでの敷地と 1800mm ほどの高低差がある。台座の上に建つ、



黄色い木造の住宅である。その台座の上には、この杉浦邸とは別に、家からさまざまに拡張、補修され、あふれ出た物が立ち並ぶ。

ある物はポリカーボネートの波板で拡張された洗濯物干し場であり、ある物は黒いシートの上に置かれたコンクリートブロックと周辺からもってこられたであろう大量の石であり、ある物はそのコンクリートブロックの上に置かれた既製品の物干し竿であり、ある物はいくつもの手すりを繋ぎ合わせてできる擁壁の輪郭線であり、ある物はどこからか拾ってきた風呂桶であり、ある物は、杉浦邸の屋根から伸びるアンテナであり、ある物は余ったコンクリートとタイルでつくられた小さな台座であり、ある物はコンクリートブロックと平行に並べられた木材の端材であり、ある物はラワン合板でできた小さなテーブルであり、ある物はモルタル、白タイル、レンガ風タイルなど様々な異なる部材が貼り付けられた擁壁そのものであり、ある物は台座の上の設えられたさらなる台座に鎮座するソテツなどであり、ある物は ... ある物は ...。

これらの物が建築や周辺の環境に負けじと目立つのは、杉浦邸そのものが下地として機能する立面をもっているからだ。杉浦邸のトタンの雨戸についての錆びは、その物をモノとして抽象される一歩手前でその物性を獲得している。逆に杉浦邸の土台である擁壁は、そのコンクリートブロックのがモノとして抽象するキーとしてのリズム感を打ち出している。これらの要素はある特定の意味に回収されることがないギリギリのところでの身を翻し、常にその物の様相を提示しているように思う。それら杉浦邸の立面要素が作り出す要素を規定する木造の構造体を住宅から取り出し、その910のグリットを住宅の上に重ねる。抽出したグリットの交点から7本の柱が生え、それは杉浦邸がもつ物の様相の一部を示し、また杉浦邸の立面が住宅の内部で現前するきっかけを与えるかもしれない。

この木の構造体は主に、主室の床を支え、また天井へと続くことで、屋根を引っ張る。

## 10. シンメトリカルな住宅 - 飯田邸の開口幅：サンプリング (23)

外壁、ファサードの開口幅、仕上げの通路幅

敷地周辺にはいくつかの建物がある。飯田八郎の道具小屋、飯田さんのハナレ（RC造の住宅）、杉浦邸（木造住宅）などだ。そしてそのどれもがたまにしか使われないため、窓に明かりがつくことはほとんどない。シンメトリカルな住宅 - 飯田邸は毎日、窓に明かりがつく。敷地から国道257号線（通称フラワーライン）をはさんだ向かいに位置し、飯田さん一家が住む。（西川名周辺には飯田という姓をもつ人が多く、飯田八郎（八郎の道具小屋の持ち主）と飯田さんは別の家族であるが、たった三軒となりに住んでいる。）

この住宅は敷地から国道をはさんむことで、距離を獲得し、その建築の形が非常に明確に認識される。また敷地そのものが国道よりも2000mm高いことから、飯田邸の二階以上が強く目に着く。周辺に立ち並ぶ建物の中では最も新しく、その外装はいまだに補修された跡をみつけることができない。

のっぺりとした建物の外装はサイディングであり、ここの地域では珍しく、ハウスメーカーがつくるようなどこにでもあつたような佇まいだ。しかし館山にあつてはこのようなプロトタイプ型の住宅は珍しく、周辺のダンチクの林や農園との強い対比が感じられる。ごちゃごちゃと有機的なところに形の整った無機質なものが放置されたかのようだ。この住宅は敷地から見える住宅で唯一人が住んでいる住宅であり、この住宅の角に位置する窓からの明かりは白く、そこに生活があることを感じさせ、夜には周りの暗さを引き立たせる。そしてその窓面は住宅の輪郭線に対して線対象に配置されているように敷地からはみて取れる。二階部分には開口や出窓があり、そのどれもが水平方向に幅を合わせて配置される。館山の雑然とした雰囲気の中で、非常に強いシンメトリカルな構成をとり、ダンチクの林の中から突出した台地のようなものである。ここではこのシンメトリカルな住宅 - 飯田邸につく象徴的な開口の幅を取り出し、その幅を住宅に面している外壁に取り付けられる二面の開口部ととその外壁をとりまくファサードの孔、そしてその孔から続く床のカーペット幅に適用した。

#### 11. シンメトリカルな住宅 - 飯田邸の外壁角度：サンプリング (28)

外壁と住宅内部の収納壁 (鏡面) との角度

10 で引用したシンメトリカルな住宅の外壁角度を住宅の外壁と、その住宅内部の収納壁 (鏡面) との角度に適用した。またこの角度をもった内壁は地下へと続き、書斎の机をもつ壁の角度へと変化していく。地上階の床はこの角度に対して平行に引かれた線から生まれる正方形に穴があげられ、この角度が地下へと落とし込まれながら、その機能が変化していくことが読み取れる。

この角度はさらにエントランスから主室へと続く階段の隅切り角度、地下へと続く階段の一段目の段鼻角度、地下へと続く階段のために切りかけられる地階の隅切り角度など、様々な部分で同じ角度が立ち現れてくる。

外壁と収納壁がもたらす角の頂点は館山のハナレで用いた、シンメトリカルな住宅 - 飯田邸、取り残されたブロック塀の軸線を踏襲し、本設計における敷地の角へと平行にずらした軸線上に配置した。この鏡面は外壁から突き出たレールに沿って動き、外壁と鏡面との間にある収納を隠す役割もつ。鏡面が動き、外壁の幅とその隙間とが一致したとき、鏡面 (収納壁)、外壁、ファサードと一直線に孔が穿たれ、そのレイヤーの最深部に飯田邸の外壁角度が立ち現れる。

#### 12. シンメトリカルな住宅 - 飯田邸の開口幅：サンプリング (23)

外壁、ファサードの開口幅、仕上げの通路幅

10 と同

#### 13. RC 住宅 - 飯田邸のハナレの開口幅：ビジュアライジング (20,28)

キッチン建具一列分の幅、湾曲した RC の外壁の開口幅、洗面所の開口幅、洗面所の収納戸、ハナレ側エントランスの建具棚板の幅、地下書斎の本棚の側板の幅 RC 住宅 - 飯田邸のハナレの開口部をここで再び引用する。4 で用いた開口とは異なる幅の開口をここでは反復して日常を支える様々な建具の一部に引用する。

RC の住宅は空き家であり、また敷地に対して向いている開口はすべてすりガラスでできているため、RC 住宅からの視線は気にする必要がない。そのため住宅という認識よりも、窓の外にある壁の一部として認識されるように、ガラス面を配し、またそのガラスの枠を RC 住宅の開口から引用することで内から外の壁へと意識がつながるようにした。RC の住宅がみえる位置にはその開口幅を用いた部材を適用し、様々な方法でこの RC の開口幅を現前させることを目指す。

#### 14.RC 住宅 - 飯田邸のハナレのスラブ高さ：ビジュアライジング (28)

手すり高さ、棚板高さ、窓サッシ下部高さ

RC 住宅 - 飯田邸は RC のラーメン構造であり、その構造体の一部、二階床スラブが外壁の外まで突出している。その突出した部分には手すりもなく、どうやらそこに出ることはできないようだ。それは庇としても機能しているとは思えない、だが RC 住宅の立面を二つに分割していることでのぺっとした印象を回避している。また立面を縁取るようにあるでっぱりとの幅が突出したスラブからの立ち上がりの幅と同じであり、このスラブの高さは住宅の立面をヒューマンスケールに落とし込むためのジェスチャーとして働いている。また突出した部分は壁面よりもよごれ、黒く色づき外壁とのコントラストを作り出している。国道から 3189mm、敷地 GL から 1189mmn の高さにあり、一部の手すりや、棚板の高さにちょうどよい。この高さを住宅内部にも設定することで、敷地内部から RC の住宅へと横滑りしていく認識をもたらす。

#### 15. 木造住宅 - 杉浦邸の開口幅：ビジュアライジング (20,28)

棚板幅 638mm

1 と同様に木造住宅 - 杉浦邸の開口幅を抽出して、反復する。主室を構成する大きな要素である。棚の側板がくるピッチを杉浦邸の開口幅と同じもので構成する。棚、開口、そして杉浦邸の開口へと異なるレイヤーで同じ寸法が立ち表れる。

#### 16. レング風タイル：サンプリング (27)

トイレ内部の壁仕上げ

6 年前まで杉浦邸の横に建っていた飯田邸 (ここもまた飯田だが、シンメトリカル住宅 - 飯田邸とは別の飯田さん) の擁壁にはレング風に色が付けられたタイルが貼られている。このタイルの色はか

なり彩度が強く、館山のまわりの自然に対抗している。

館山のハナレで対象にしたソテツはこの彩度の強い擁壁の上に設えられており、ソテツの生命力とこのタイルがもつ色艶のコントラストが強い。飯田さんがこの土地を後にしてから誰にも手をかけられてこなかったソテツは、この擁壁で囲われた土地をだんだんと浸食しているようだった。現に一部アプローチであったであろう擁壁が切り込まれた階段は、その行く先を完全にソテツに阻まれているようだった。そして擁壁そのものが一部傾斜し、いたるところでタイルが剥がれ落ち、かけている。6年前に館山をあとにして移住した飯田さんは、タイル職人であったことからこの擁壁のタイルはすべて自分で貼り付けたそう。また擁壁の一部に軽自動車一台分は入る大きさの車庫が設けられている。そこにはまだ使えそうなタイルが大量に放置されている。しかし長い間放置されていたタイルはまったく色褪せがなく、いつでもどこでも使ってくださいと言わんばかりだった。館山のハナレの施工を手伝いにきた友人がタイルをつかった製作のためにかなりの分量を持ち帰ったほどだ。このタイルを見たとき、館山の驚異的な自然の力に対抗する人々の活動の一端を垣間見た気がした。このタイルを住宅のトイレの内装として使う。内壁でみたとき、外の擁壁でみたとき、それぞれ色味が異なりそこに付加される意味も異なる。似ているけれど、少しだけ異なる対象同士への認識が結びつくとき、より一層強い認識がえられる。

#### 17. 白タイル：サンプリング (27)

浴室内部の壁仕上げ

16と同様に外部にある対象を内部に使う。木造住宅 - 杉浦邸の擁壁は様々な材料がつぎはぎされている。コンクリートブロック、モルタル、白タイル、レンガ風タイル、紫色のタイル、白ペンキ様々な部材がつぎ足されて構成されている。その一部分を覆う、白タイルの壁を住宅の浴室に使う。

#### 18. 木造住宅 - 杉浦邸の開口幅：ビジュアライジング (23)

台所棚板の幅

1,15など様々な部位にこの木造住宅 - 杉浦邸の開口幅を引用している。ここでは台所の棚板の幅にそれを適用している。台所の棚には他にもRC住宅 - 飯田邸のハナレの開口幅をもってきている。様々な部位の寸法が台所という住宅の中心で出会う。

#### 19. 木造住宅 - 杉浦邸の外溝部てすり：サンプリング・ビジュアライジング (19,23)

エントランス階段手摺、落下防止柵、テラス手すり、テラス落下防止柵、洋服収納建具、ファサード手すり

杉浦邸の擁壁外周部にはアルミの手すりが回っている。擁壁や木造の住宅そのものに比べるとはる

かに薄く、かawaiiものだが、手すりそのものが擁壁を囲うための長さをもつことや、その手すりそのものが様々な部材(洗濯ものの竿、アンテナ、はしご、スケールの少しだけ異なる手すり)から構成されていることで、確かな存在感をもっている。また敷地から杉浦邸をみたとき、その手すりは住宅へのフレームとしても作用する。薄く、普段は目につかないが、ふとしたときに立ち現れるこの手すりを住宅の様々な部分に形を変え、プロポーションを変えながら入れ込んでいく。同じ寸法の材でつくすることで、その手すりをつかんだ時、どこか見覚えのある感触を手にするようになる。

## 20. 住宅解体時に取り残されたブロック塀：サンプリング (23)

### ハナレ側エントランス腰壁

ハナレの北東にはもともと別荘があった。2019年の台風15号によって屋根が一部損壊し、その部位を補修するなら、ほとんど使われていなかった別荘をこのタイミングで手放そうと、解体されたそう。

その際に取り残されたのがこのコンクリートのブロック塀だ。その塀は塀の先にある崖から這い出てくる小動物や虫、また植物をせき止めるように立っている。おそらく解体を要請したここの住人もこの壁だけは意図的に残したのだろう。それはこの館山の自然への抵抗の印でもあり、また人工物が自然の一部へと回収される様相を示しているものでもある。塗装がはげ、コンクリートブロックがあらわになり、また異なる色が塗装され、そして自然がそれを崩してく。人間と館山の自然とがつくりだした遺物だ。館山のハナレでも対象にしたこの塀をこの住宅のエントランス脇の腰壁として引用する。エントランス横にくるこの塀には日常で使われる様々なものが置かれる。

## 21. ソテツ：サンプリング (23)

### 日当たりの悪い外構内に位置する植栽

館山ではよくソテツを目にする。そのソテツはほとんどの場合、誰かによって植えられたものである。立派なコンクリートの台座の上に設えられたものも少なくない。そして大抵の場合そのソテツは異常な生命力でその台座を壊しにかかる。またその動きに合わせて人間もその台座を補修する。つまりソテツは人間がもたらす館山の自然の脅威ともいえる。昔から非常に強い生命力とその出で立ちからソテツを飾れる家は金持ちだと言われているが、そのソテツがもつ力は人間がコントロールできるようなものでは決してない。そして館山のハナレの目の前にも例外なきソテツが台座に設えられており、そのソテツは行く手を阻み、住宅そのものが解体されたあとも、ひとりでに増殖し続ける。このソテツを日当たりの悪い外構に挿入する。ソテツが日差しを求めて外構から首をだし、トタン戸へと近づき室内からその湾曲した物を見ることができるともかもしれない。

## 22. ダンチク：サンプリング (23)

日当たりの悪い外構内、テラス側溝、どこにでも生えてしまう植栽

ダンチクはもとは海風からの防風林として植えられたものだった。しかし今では館山のあちこちに自生している。竹藪と形は似ているものの、生命力が強く、生え方もまっすぐではなく、様々に入り乱れるため面として作用している。大きくなりすぎたダンチクはあまり見栄えもよくなく、なにかその藪のなかに潜んでいそうな雰囲気すらある。そのダンチクはきつとこの住宅の隅々に生えていくだろう。あえて生えることのできる場所を用意することで自然に生えてしまったダンチクとの差を意識させる。

## 23. 竹藪：サンプリング (23)

ハナレ側エントランス南側植栽、寝室外部植栽 調整される植栽

館山のハナレでも対象にした竹藪である。イネ科の植物が大量に生息している館山で竹藪が綺麗に生えている場所は珍しい。ダンチクと近い形態をもつこの竹藪は館山のハナレの南側にハナレと隣地とを隔てるように並んでたっていた。この竹藪の並びを字拡張するように地面を引き伸ばし住宅の敷地内にも竹藪を植える。この竹藪はハナレと住宅の二つの曲面の間を歩くときに奥へ奥へとつづく道の消失点にあたる。

## 24. ソテツ、木造住宅へ：フレーミング (5,6,8,11,13,18,21,22,24)

鏡面を設けることで住宅内にソテツを映し出す。鏡面は収納の扉として動き、ある位置にその鏡面があるとき、木造住宅 - 杉浦邸からソテツへと軸が反射しながらつながる。ソテツ側からその鏡面をみると主室の棚板の向こう側に杉浦邸が見える。棚板の幅がもたらすリズムと杉浦邸の立面に見える開口のリズムは同じであり、そこに類似性が見出せる。

## 25. シンメトリカルな住宅、コンクリートブロックへ：フレーミング (3,5,6,7,8,10,11,13,18)

館山のハナレから引き継いだ対象物へのフレームをここでも適用する。しかし、館山のハナレでは強烈な瞬間的フレームであるのに対してここでは、複数の材が重なる時にゆるく見えるフレームであり、日常の様々なタイミングで視覚誘導が行われるように材を配置した。

## 26. RC 住宅へ：フレーミング (2,7,8,9,16,18,21,22)

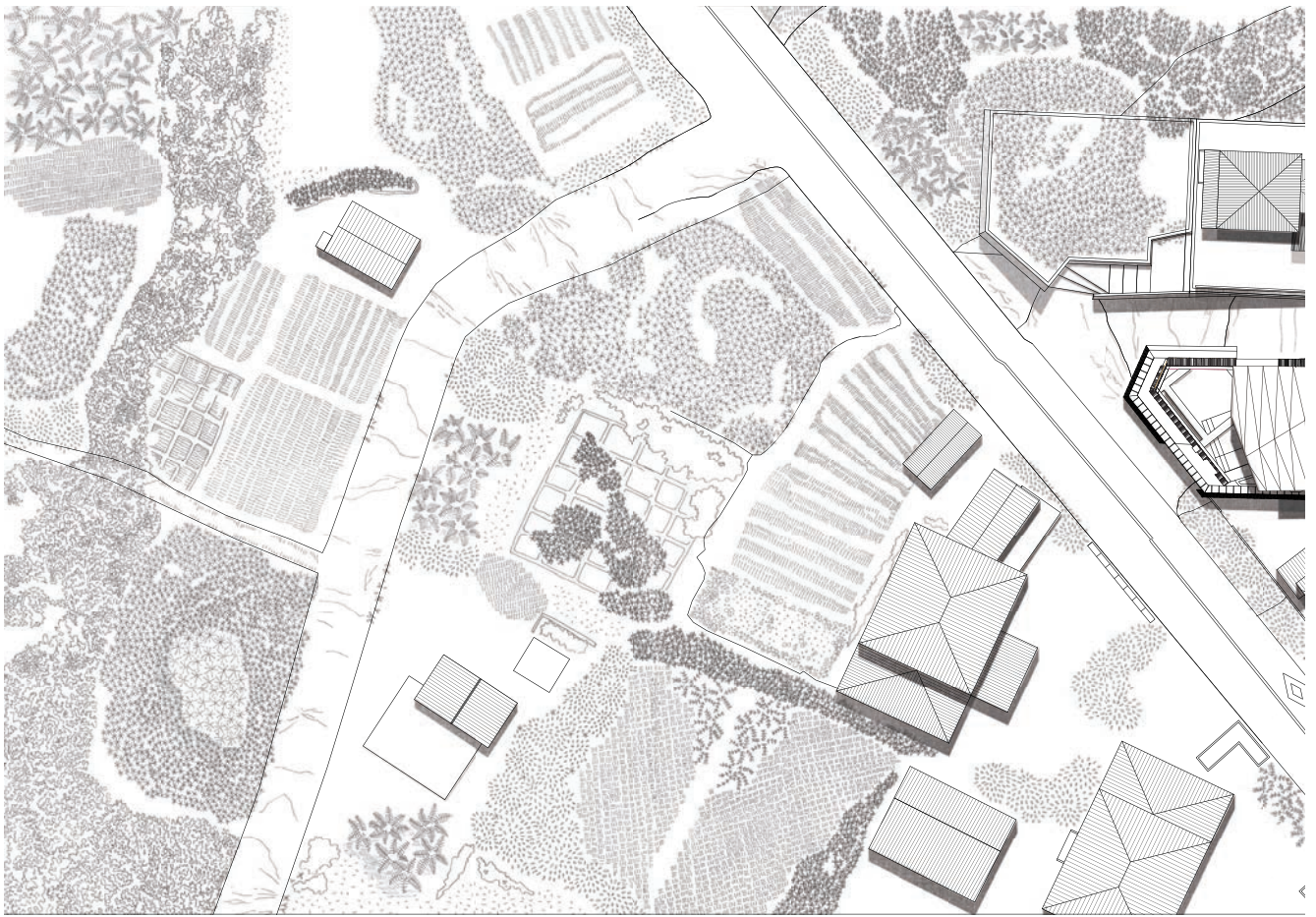
エントランスから入り、主室へと向かう階段は杉浦邸に対して水平に始まり、RC 住宅 - 飯田邸のハナレへとゆるく湾曲しながら進んでいく。斜めの床をくぐり、階段をのぼりながら RC の住宅が立ち現れる。

27. 太平洋、富士山へ：フレーミング (2,5,7,8,12,21,22)

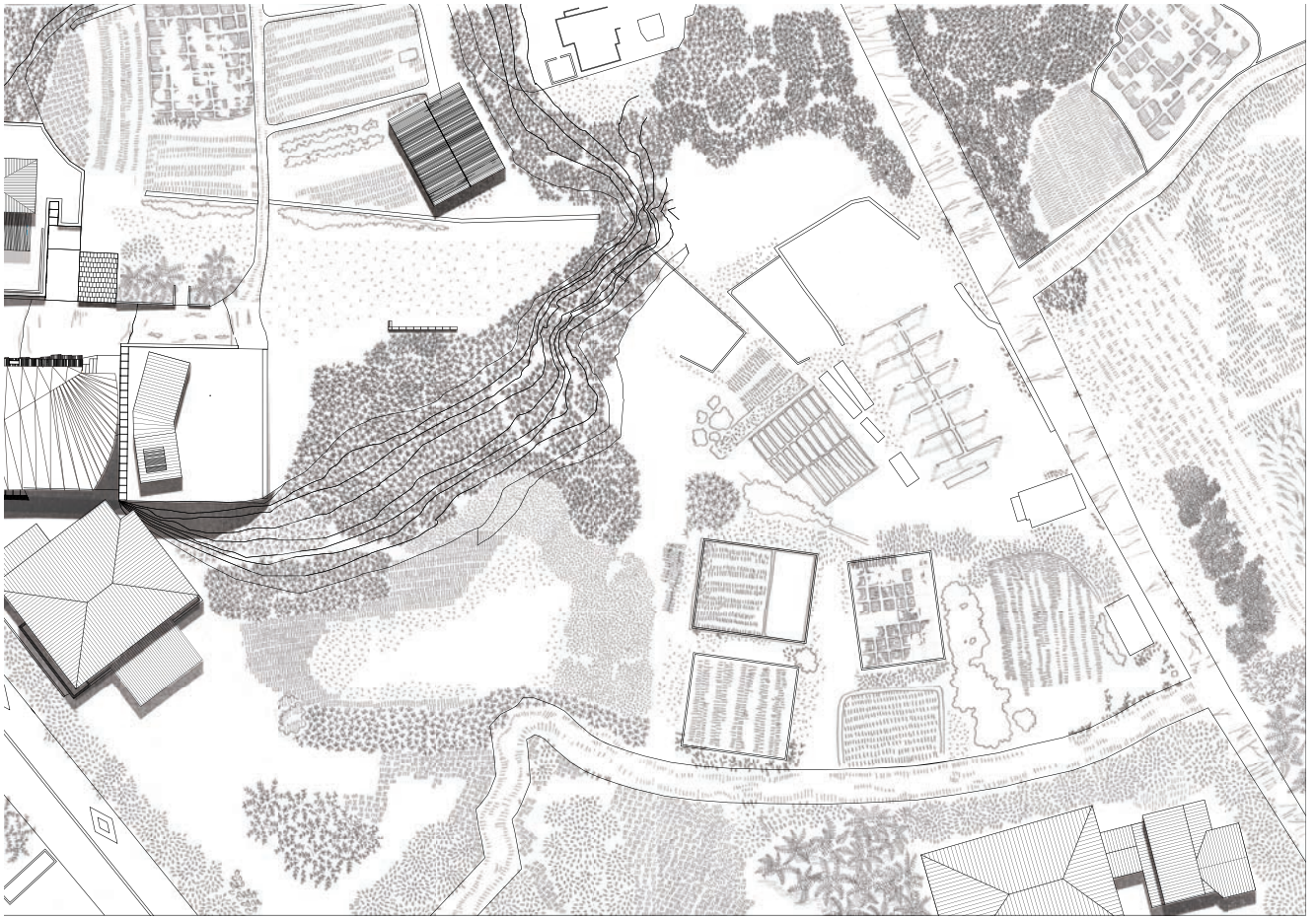
敷地は太平洋に近く、徒歩5分ほどで海にはいれる。館山のハナレでは施主は海の見えるテラスが欲しいとのことだったが、予算もなく、ハナレの敷地から見るにはかなりハナレの屋根に登らなければ海が見えなかった。住宅では主室からファサードを通して太平洋と向かいに見える富士山を射貫く。

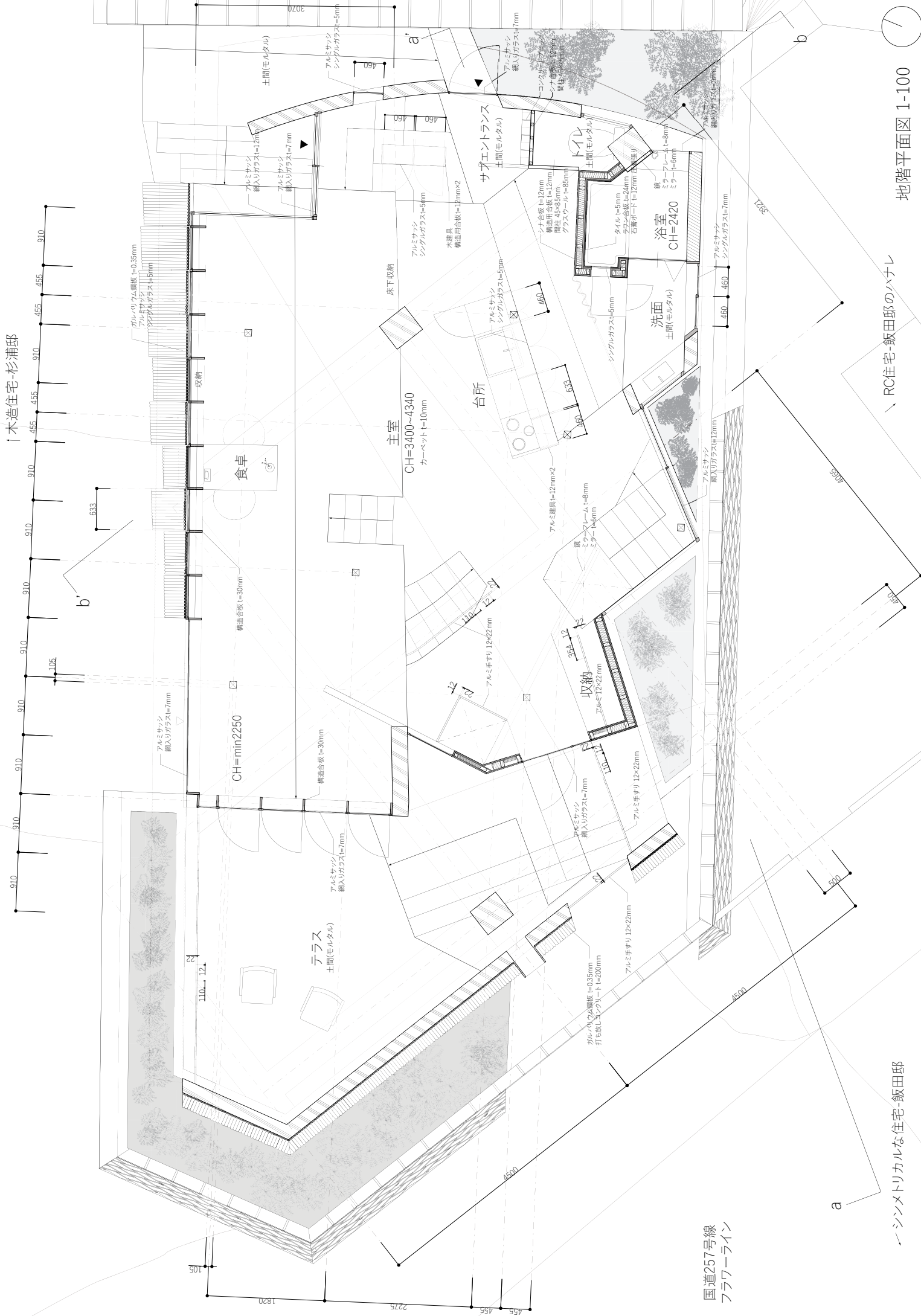
28. ダンチク、竹藪へ：フレーミング (3,15,16,17,22,24)

住宅のさまざまにサンプリングしてきた植栽をフレーミングする。駐車場の上部に配された植物たちは朝日を受け、地下へと影を落とし、駐車場をその影で満たす。また時間が変わることによって書斎へとその影は伸びてゆく。また寝室の目の前の竹藪は寝室の窓枠(仕上げをせりだし、サッシ枠は見えない)によって切り取られ、さらにガルバニウムのトタンファサードにその色味や動きを出す。ハナレ側のエントランス付近に配された竹藪は浴室やトイレから見られる。

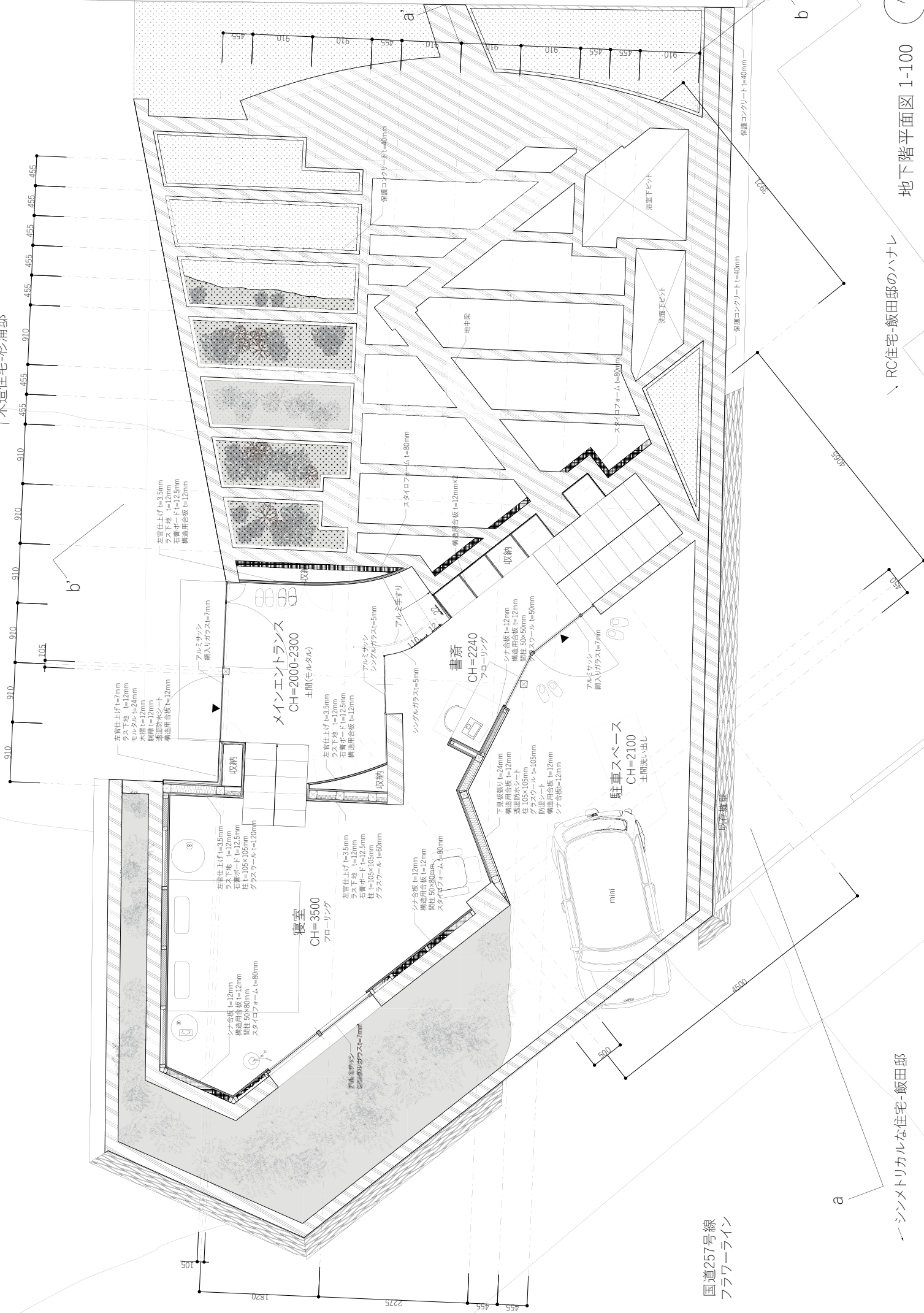






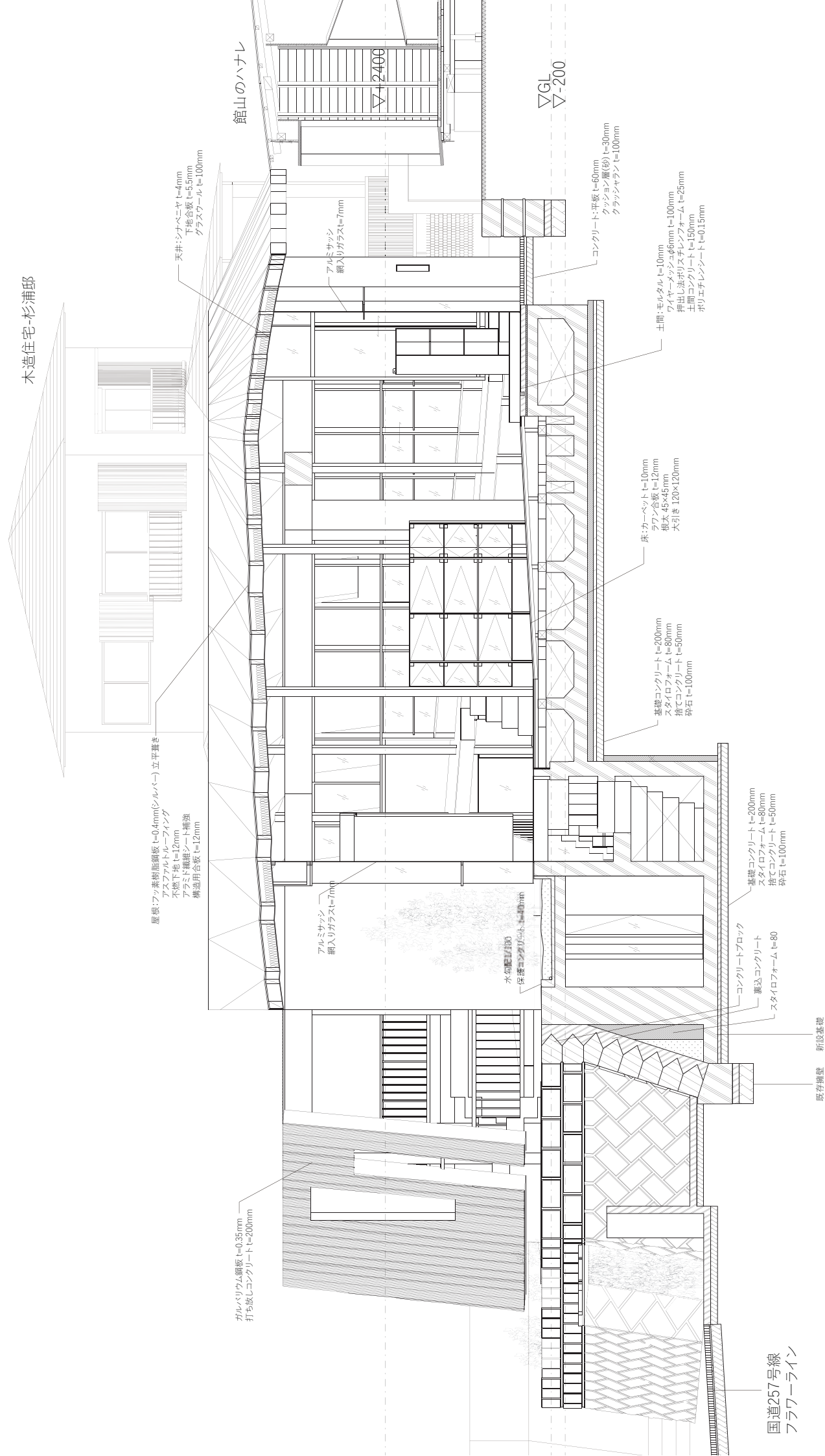


国道257号線  
フラワーライン



国道257号線  
フラワールイン

木造住宅-杉浦邸



屋根：フック樹脂脂顔板 t=0.4mm(シルバー) 立平葺き  
 アスファルトルーフィング  
 不燃下地 t=12mm  
 アラミト繊維シート補強  
 構造用合板 t=12mm

ガルバリウム鋼板 t=0.35mm  
 打ち出しコンクリート t=200mm

アルミサッシ  
 網入りガラス t=7mm

水気配管 t=100  
 保護コンクリート t=40mm

基礎コンクリート t=200mm  
 スタイルフォーム t=80mm  
 捨てコンクリート t=50mm  
 砕石 t=100mm

床：カーペット t=10mm  
 フロン合板 t=12mm  
 根太 45×45  
 大引き 120×120mm

土間：モルタル t=10mm  
 ワイヤメッシュφ6mm t=100mm  
 押し出しポリスチレンフォーム t=25mm  
 土間コンクリート t=150mm  
 ポリエチレンシート t=0.15mm

コンクリート：平版 t=60mm  
 クッション層(砂) t=30mm  
 クラッシュヤーン t=100mm

基礎コンクリート t=200mm  
 スタイルフォーム t=80mm  
 捨てコンクリート t=50mm  
 砕石 t=100mm

コンクリートブロック  
 裏込コンクリート  
 スタイルフォーム t=80

既存構壁 新設基礎

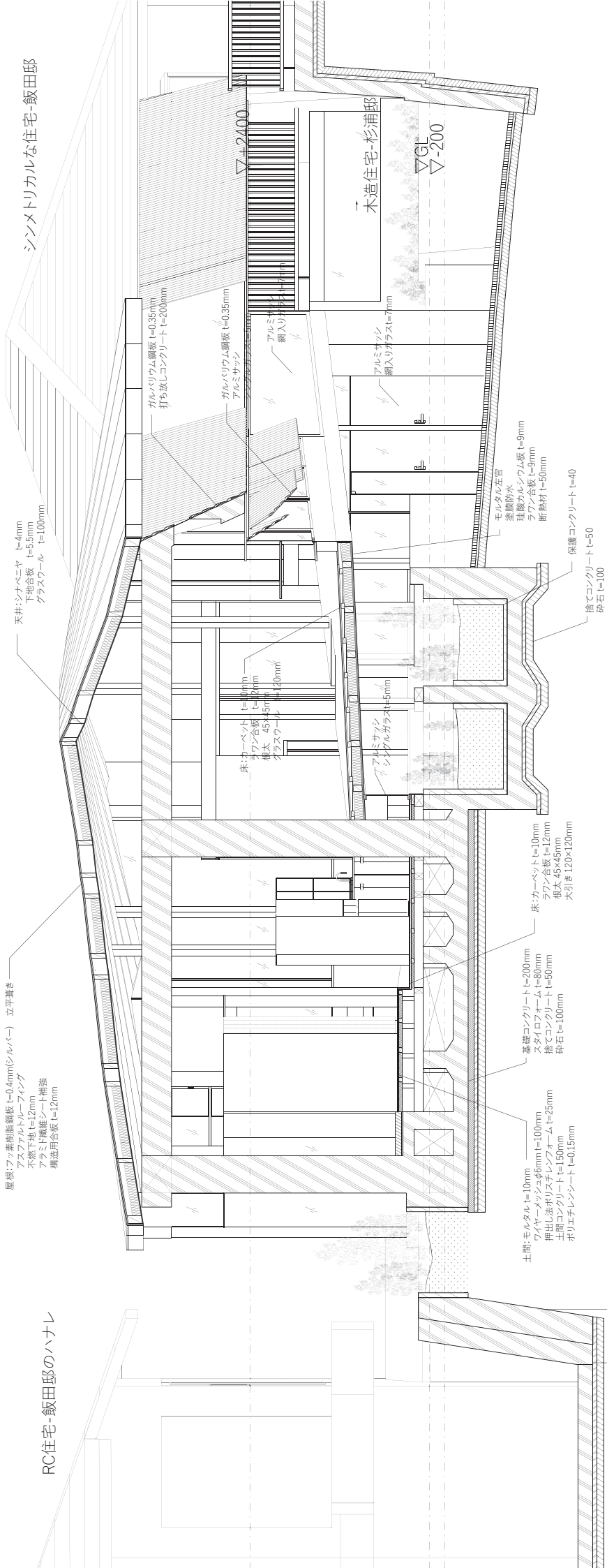
国道257号線  
 フラワーライン

館山のハナレ

▽GL  
 ▽-200

▽+2400

シンメトリカルな住宅-飯田邸



RC住宅-飯田邸のハナレ

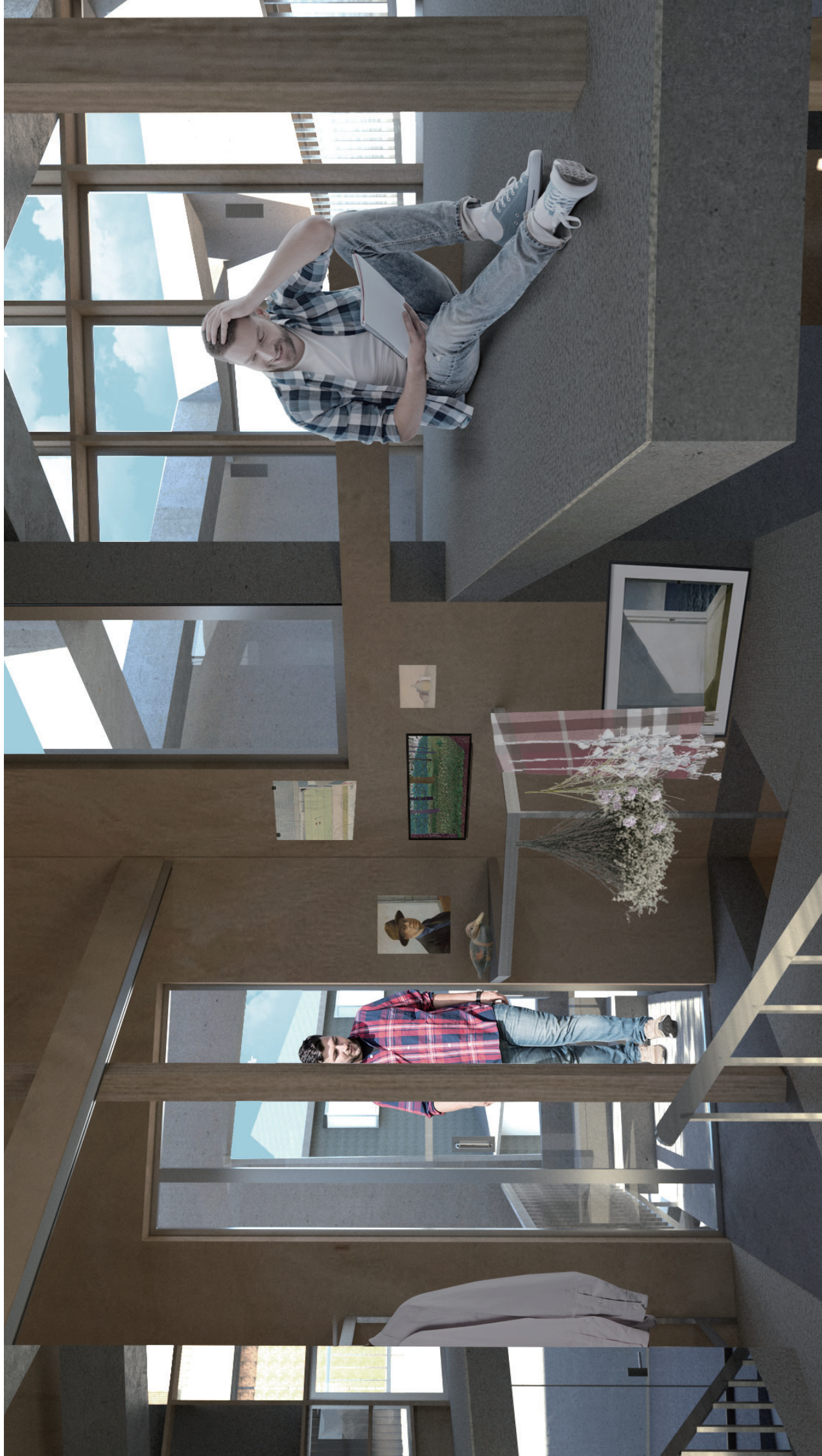
b-b'断面図 1-100



▲対象にしたソテツが室内に映し出される。この鏡面は収納の扉としても機能している



▲ハナレから引き継いだシンメトリカルな住宅への指向空間を残しつつ、柱や建具で崩していく



▲サンプリングしたりは、様々な形を変えながら住宅内で機能する。





▲ RC住宅と木造住宅からピジュアライジングした構造体が居場所を規定する。



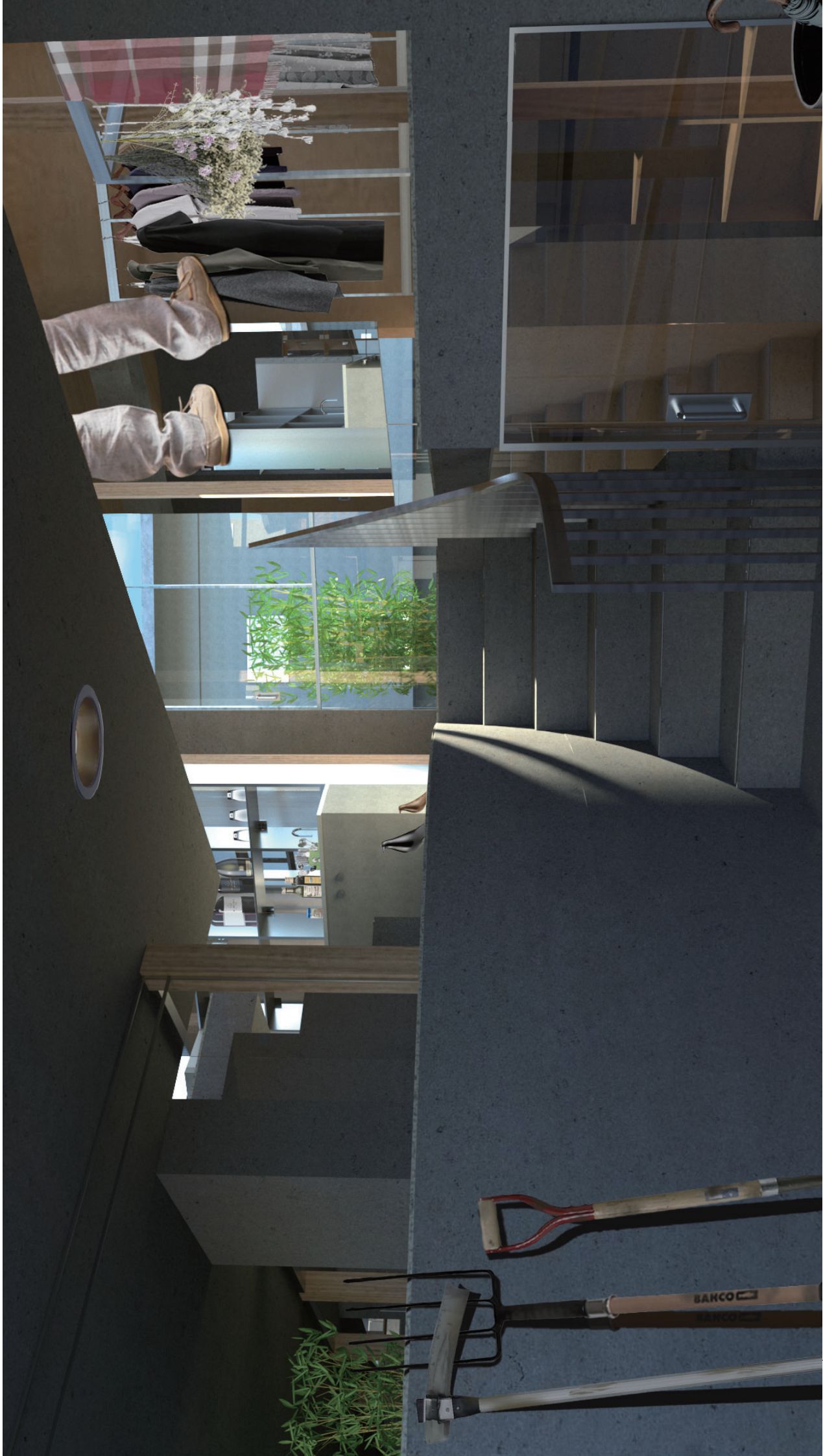
▲地下の書斎にある収納はRC住宅の構造体と同じモジュールで組まれている。



▲テラスの先に見える太平洋へのフレーム。サンプリングした収納が指向空間を強める。



▲外構に生えるであろう竹藪やダンチクを見越して、孔を穿つ。時間帯によって地下空間はその影で充滿する



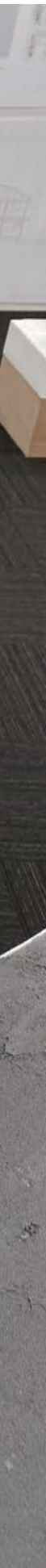
▲木造住宅からRC住宅へのゆるいく曲がる軸線が、サンプリングした手すりや開口幅によって演出される。







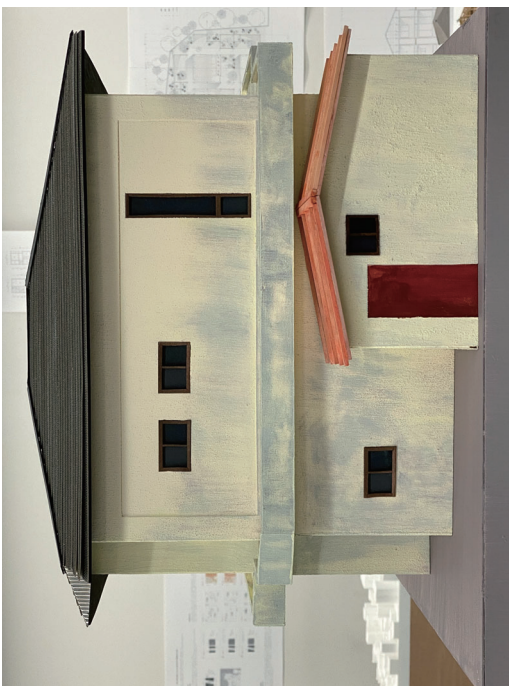














## 第7章

### まとめ

本研究では日常の外縁のゆらぎを認識の枠組みの内に定義し、それを誘発する設計手法を提案した。

試設計においては実際に建てられ、その実空間を経験することで設計手法を見直す契機を手に入れ、設計手法の再提案に至った。

本研究の当初の目的は対象と主体との関係を強める空間の探求にあったが、試設計した館山のハナレを施工するにあたり、建築とはある認識を強めるためだけではなく、より多義的な意味合いをもつものであるということを再認識した。

そこである対象への認識を一時的に強める設計手法ではなく、生活に寄り添いながらも、ふとしたときにその対象への認識が変化するような建築を設計することを目指した。

そして本設計においては、単に認識（日常の外縁のゆらぎ）を支配するのではなく、あくまでも認識を下支えするような建築を提案した。







## 【参考文献】

- 1) 鷺田清一『想像のレッスン』筑摩書房,2005
- 2) ダニエル・N. スターン『乳児の対人世界』岩崎学術出版,1989
- 3) 十川幸司『思考のフロンティア 精神分析』岩波書店,2003
- 4) イマヌエル・カント 宇都宮芳明監訳『純粹理性批判 上』以文社,2004
- 5) 菅木志雄『世界を〈放置〉する ものと場の思考集成』ぷねうま舎,2016
- 6) 國分功一郎『暇と退屈の倫理学』太田出版,2015
- 7) 大澤真幸『コミュニケーション』弘文堂,2019
- 8) 日高敏隆『動物と人間の世界認識』筑摩書房,2007
- 9) ヤーコブ・フォン・ユクスキュル『生物から見た世界』岩波文庫,2005
- 1 0) 檜垣立哉・小泉義之・合田正人編『ドゥルーズの2 1 世紀』河出書房新社,2019
- 1 1) カンタン・メイヤスー『有限性の後で:偶然性の必然性についての試論』人文書院,2016
- 1 2) 千葉雅也『思弁的実在論と現代について』青土社,2018
- 1 3) グレアム・ハーマン『四方対象:オブジェクト指向存在論入門』人文書院,2017
- 1 4) David Skrbina『Mind that Abides Panpsychism in the new millennium』John Benjamins Publishing Company, 2009
- 1 5) 飯盛元章『連続と断絶:ホワイトヘッドの哲学』人文書院,2020
- 1 6) アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド『過程と実在〈1〉コスモロジーへの試論』みすず書房,1981
- 1 7) 平瀬有人『フレーミングの平地および重層による建築空間の実践的研究』学位論文,2017
- 1 8) 原広司『建築に何が可能か』学芸書林,1967
- 1 9) クリスチャン・ノベルク・シュルツ『実存・空間・建築』鹿島出版会,1973
- 2 0) 岡崎乾二郎『抽象の力ー近代芸術の解析』垂紀書房,2018



## 【謝辞】

毎日、朝4時までやって10時に起きて作業を再開する、ちょっと特別な期間でした。好きなことだったからこそ、ここまで追い込めたし、身体はずっとギリギリでしたが、本当に楽しむことができました。お手伝いしてくれた、清水さん、山本くん、ノイ、ヤジ、オチ、江藤さん、高瀬くん、丈太朗くん、しよこ、橋口さん、曾根くん、木戸ちゃん、早川さん、館山のハナレの施工手伝ってくれた皆さん、たまにチャチャ入れにきてくれた飛田、瀬戸くん、ずっと隣で作業してた宮田・山田くん、設計の相談乗ってくれた堀江さん、館山の設計チャンスをくれたただ君、最後まで背中を押し続けてくれた坂牛先生、平田さん、大変お世話になりました。

そして建築のことは全く分からなくても、僕のことを理解し、最後まで支えてくれた妻に感謝します。

1-20の模型、建築を横から見るための什器、1万2千字のアクソメ、勉強しながら描いた矩計図、館山のハナレの竣工写真、そして江藤さん渾身の手書き配置図！どれも宝物です。

ここで培った建築の理論と実作を糧に自分の建築道を歩んでゆきたいです。



